はじめに

この報告書は、2011 年 3 月 5 日に堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンターで開かれた、「デンソーカップ堺大会記念シンポジウム with サロン 2002」の内容を、サロン 2002 が責任編集したものです。講演・シンポジウムの内容だけでなく、「育成期のサッカー」にかかわる関係者からの寄稿もあわせて冊子にしました。発表された方、原稿を寄せて下さった方はもちろん、ご協力下さったすべての方々に心より御礼申し上げます。

スポーツ文化研究会「サロン 2002」は、その前身を、1980 年代末の、日本サッカー協会科学研究委員会「社・心グループ」に認めることができます。社会学や心理学に興味を持つ、サッカーの研究者・指導者による小さな研究会でした。それが 1990 年代以降、サッカー界を取り巻く状況が劇的に変化し、インターネットが爆発的に普及したことにより、全国各地の熱き "同志"のネットワークとして確立し、今日まで成長を続けています。詳しくは本文 (p.5 および pp76~81) をご参照ください。

2010 年度は「育成期の指導」を月例会テーマに据え、様々な角度からこの問題を取り上げました。 当初は、育成期を U-18 年代、つまり高校を卒業するまでととらえ、年度末のシンポジウムもその方 向で準備を進めていました。しかし予定していた開催日とデンソーカップの日程が重なることがわか り、そこから全日本大学サッカー連盟とのコラボレーションがはじまります。そして育成期を、大学 生年代まで含めて捉え直し、"競技力向上"と"幅広い人材育成"について幅広く議論する、今回の企 画にたどりつきました。

私自身、母校蹴球部の同窓生として後輩たちと接することが多く、また教育実習生を毎年数多く受け入れる学校に勤務していることもあり、高校教諭の割には大学生と接する機会が多い立場にあります。そこで感じるのは(自分が学生の頃も感じたことですが)、「大学生年代は人生にとって非常に重要な年代である」ということと、「学生スポーツの姿が、日本におけるスポーツの地位の高低に影響する」ということです。

競技力の側面だけではありません。試験のための勉強しかしない「試験〇〇」とスポーツしかしない「スポーツ〇〇」を再生産するだけでは、大学は、学生スポーツは、ダメになります。"文武一道"でバランスの取れた人材を世に輩出することが、スポーツの地位向上につながり、あらゆる分野の「育成期の指導」に求められるのではないでしょうか。

シンポジウムでは、各演者から示唆に富む、すばらしいお話をいただきました。議論半ばで終わってしまったのは、進行役である私の力量不足によるものです。「育成」というテーマの大きさと、コラボレーションの難しさを感じましたが、やりがいのあるテーマです。

これからも「育成期の指導」についてはさまざまな場面で語られることでしょう。サロン 2002 でも今後、全日本学連をはじめとする諸組織・機関と連携しながら、この問題に取り組んで参りたいと考えます。

この報告書が、さまざまな現場で活かされることを願っております。

2011 (平成 23) 年 5 月 サロン 2002 理事長 中塚義実

デンソーカップ堺 大会記念 シンポジウムwithサロン2002

育成期のサッカーを語ろう!

− キッズからU-22までの指導と環境を考える −

このたび、株式会社デンソー様の特別協賛のもと、全日本大学サッカー連盟とスポーツ文化研究会「サロン 2002」、ならびにデンソーカップ実行委員会の共催で、「育成期のサッカーを語ろう!」と題するシンポジウムを企画しました。

育成期をキッズから U-22 年代までと捉え、競技力向上へ向けて各年代において何を為すべきかを議論するとともに、サッカー・スポーツの地位を高め、次のスポーツ環境の担い手となる人材をどのように育てていくかを幅広く議論して参りたいと考えております。

このシンポジウムで、多くの方と、日本のサッカー・スポーツの未来をともに語り合えることを楽しみにしています。

記

特別協賛 : 株式会社デンソー

主 催: 財団法人日本サッカー協会、全日本大学サッカー連盟、スポーツ文化研究会「サロン 2002」、

デンソーカップ実行委員会

後 援 : 関西サッカー協会、社団法人大阪府サッカー協会、関西クラブユースサッカー連盟、大阪府クラブ

ユースサッカー連盟、日本フットボール学会、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ

日 時: 2011(平成23)年3月5日(土)16:00~19:00 (受付15:30~)

会 場: 堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター・クラブハウス内大会議室

(大阪府堺市堺区築港八幡町 145 番地)

概 要: 16:00~17:00 講演

上田 亮三郎(全日本大学サッカー連盟顧問)

17:00~19:00 シンポジウム

演 者:松田 保 (びわこ成蹊スポーツ大学)

黒田 和生(ヴィッセル神戸育成副部長)

関塚 隆 (日本サッカー協会ナショナルコーチングスタッフ/U-22 日本代表監督)

コーディネーター: 中塚 義実(サロン 2002 理事長/筑波大学蹴球部同窓会茗友 SC 理事長)

参加申込 : サロン 2002HP トップページ(http://salon2002.net/)からお申込み下さい

参加費:無料

事 務 局 : 高田敏志 (サロン 2002 理事) ※お問合せは salon2002@j-sps.com まで

- 懇親会のお知らせ -

シンポジウム終了後、同会場にて講師の方も交えて懇親会を開催いたします。 ご都合の宜しい方は奮ってご参加下さい。多数の皆様のご参加をお待ちしております。

日時 : 2011 年 3 月 5 日(土) シンポジウム終了次第~(1 時間程度)

会費 : 2000円

<講演・シンポジウム 演者等プロフィール>

上田 亮三郎 (全日本大学サッカー連盟顧問)

愛媛県出身。松山南高でサッカーを始め、愛媛大学から東京教育大学に編入。卒業後の1961年に、 当時3部だった大阪商業大学サッカー部監督となり、1965年には1部へ昇格させた。以降、同部を関 西学生選手権優勝11回、同リーグ戦優勝18回、全日本大学選手権優勝4回、総理大臣杯優勝2回の 強豪に育て上げた。

1969 年、千葉県検見川で行われた第1回 FIFA コーチング・スクールに参加。同スクールで助手を務めた長沼健・岡野俊一郎らとともに、世界初の FIFA コーチ・ライセンスを受けた。日本代表技術・強化委員としては次の経歴がある。

- ・国際親善サッカー東南アジア6カ国遠征日本代表Bチーム監督
- ・1979年ユニバーシアード・メキシコ大会日本代表監督
- ・マラハリムカ大会日本代表 B チーム監督 3回
- ・日本学生選抜チーム・ヨーロッパ遠征監督(西ドイツ、英国、ベルギー、アイルランド)
- ・キリンカップ国際大会・日本ユニバーシアードチーム監督
- ・日韓サッカー定期戦日本代表 B チーム(学生選抜)監督3回
- ・クアラカップ国際大会日本代表チーム監督

2002 年からは大商大サッカー部総監督に就任。全日本大学サッカー連盟副会長・関西学生サッカー連盟特任理事などを歴任し、現在も大学サッカー界の重鎮として活躍される。また、KBS 京都テレビにてサッカー解説者もつとめる。

大阪商業大学サッカー部での教え子として、小嶺忠敏、小林伸二、松永英機、加藤好男、勝矢寿延、 本並健治、高木琢也らがいる。

松田 保(びわこ成蹊スポーツ大学教授)

滋賀県近江八幡市出身。1966年に金沢大学教育学部特別体育学科入学。卒業後は高校教師として滋賀県に赴任。甲南高校、守山高校、守山北高校でサッカー部監督を歴任。1982年度には守山高校を率いて全国高校選手権ベスト4進出、1994年度には守山北高校でもベスト4進出を果たす。

1993 年から 1995 年までは小野伸二、稲本潤一ら「黄金世代」を擁した U-17 日本代表監督を務め、FIFA U-17 世界選手権に出場した。

2001年にS級ライセンスを取得。2003年にびわこ成蹊スポーツ大学開学より勤務。現在同大学教授、スポーツ開発・支援センター長およびサッカー部総監督。2010年度、滋賀県サッカー協会会長に 対任

★サッカー・スポーツとの関わり (サロン2002会員名簿より)

「滋賀県高校保健体育教員 33年間、大学指導者8年目、サッカー指導者41年目」

★現在関心を持っていること(サロン2002会員名簿より)

「世界のファンタジスタをびわこから創る。キッズからの一貫指導の確立。スポーツ遊びが子供を救う、地域を救う、世界を救う」

黒田 和生(ヴィッセル神戸育成副部長)

岡山県倉敷市出身。1967年に東京教育大学体育学部入学。在学中は関東リーグ、インカレの優勝に 貢献。卒業後、1971年から1984年まで神戸FCで少年指導とクラブ創りに携わる。1984年に新設の滝 川第二高校の教員(保健体育科)としてユース年代の指導にあたる。高校サッカー界では無名の存在 であった同校を1986年の全国高等学校サッカー選手権大会初出場、1998年にベスト4に導くと、2005 年には高円宮杯全日本ユース選手権大会を制する等、全国有数の強豪校に育て上げた。

2007年3月に同校を退職。2007年4月から現職。2009年からはユースの監督を兼任している。

★サッカー・スポーツとの関わり(サロン2002会員名簿より)

「(前略) "少年の心"をテーマに"怯まず、驕らず、溌剌と"のモットーどおり突っ走ってきました。学園理事長のご理解もあり、数多く全国大会に出場(37回)させていただきました。もちろん選手のがんばりとスタッフのチームワークが一番の要因と思いますが、たくさんの人に支えられて充実した日々でした。Jリーガーも35人出ましたが、それよりも卒業後、指導者として、審判としてまたそれ以外にサッカー関係者として活躍してくれていることがうれしい限りです。」

★現在関心を持っていること(サロン2002会員名簿より)

「現在は、ヴィッセル神戸のアカデミー事業副本部長として幅広く育成に関わっていきます。コーチの養成が最も大切と思います。09年より、ユースチームの監督も引き受けるようになりました。さらに勉強を重ね社会に貢献できる人材を送り出したいと思います。テーマは"GOOD GAME"です。」

関塚 隆(日本サッカー協会ナショナルコーチングスタッフ/U-22 日本代表監督)

千葉県立八千代高校から早稲田大学教育学部へ。当時の早大蹴球部には3学年先輩に原博実がおり、また吉田靖、城福浩らともチームメイトだった。卒業後、日本サッカーリーグ1部に昇格したばかりの本田技研工業(現Honda FC)に進み、チーム隆盛の礎を築いた。自身は1年目の1984年シーズンに得点ランキング2位となり、新人王とベストイレブンのタイトルを獲得している。

1991 年に現役を引退し、指導者へと転身。母校の早大ア式蹴球部監督を経て、1993 年に鹿島アントラーズにコーチとして招かれ、そこで大学時代および本田技研時代の恩師である宮本征勝の薫陶を受けた。その後 1995 年に宮本の清水エスパルス監督就任に伴い清水に籍を移すが、翌年鹿島に復帰。ジーコ、ジョアン・カルロス、トニーニョ・セレーゾといったブラジル人指導者の下で「勝者のメンタリティー」を学ぶ。1998 年、1999 年には鹿島の監督代行も務めた。

2004 年に当時 J リーグ 2 部 (J 2) の川崎フロンターレ監督に就任。 J 2 で優勝、その後、 J 1 でも上位争いを繰り広げるチームを構築した。

2008 年シーズン途中の4月、健康不安を理由に川崎監督を一旦辞任し、スカパー!のサッカー中継などで解説者を務めつつ静養と体調回復に努める。2009 年に川崎の監督に復帰したが、シーズン終了を以って退団。2010 年は再びスカパー!のサッカー解説者を務めるが、9月9日付で日本サッカー協会理事会にてサッカー日本代表コーチに選任。現在、A代表コーチと U-22 代表監督を兼任する。

中塚 義実(筑波大学附属高等学校教諭)

大阪府立三島高等学校卒業後、1980年に筑波大学体育専門学群入学。同大学院修士課程でスポーツ 社会学を専攻し、修士論文「日本サッカーのプロ化過程の研究」に取り組む。

1987年より現職。保健体育科教諭、サッカー部顧問として、ユース年代の指導に当たる。

1996年度にユースサッカーリーグ「DUOリーグ」を創設、チェアマンを名乗る。1997年度より「サロン2002」の名称でスポーツ文化研究会を主宰、理事長を務める。2008年度からは筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ理事長。「日本サッカーの宗家」と言える同クラブは、2010年度から現役学生と卒業生を含めた多世代型クラブ組織として再編し、日本型の新たなクラブ像を目指している。

デンソーカップ堺 大会 記念 シンポジウムwithサロン2002

育成期のサッカーを語ろう!

− キッズからU-22までの指導と環境を考える −

16:00~17:00 講 演

上田 亮三郎 (全日本大学サッカー連盟顧問)

17:00~19:00 シンポジウム

演者 松田 保 (びわこ成蹊スポーツ大学)

黒田 和生 (ヴィッセル神戸育成副部長)

関塚 隆 (日本サッカー協会ナショナルコーチングスタッフ/U-22 日本代表監督)

コーディネーター 中塚 義実 (サロン 2002 理事長/筑波大学蹴球部同窓会茗友 SC 理事長)

<はじめに>

<前半戦. キッズから U-18 年代における育成について>

- ■プレゼン① 松田保氏
- ■プレゼン② 黒田和生氏
- **■**ディスカッション①

<後半戦. U-22 年代における育成について>

- ■プレゼン③ 関塚隆氏
- **■**ディスカッション②

<延長戦. 大学サッカーは何をすべきか>

■ディスカッション③

デンソーカップ大会実行委員会本部長挨拶

福岡大学 乾 真寛

高田 (司会)

ただ今から、「育成期のサッカーを語ろう! ーキッズから U-22 までの指導と環境を考えるー」というテーマで、デンソーカップ堺大会記念シンポジウムを開催させていただきます。

まずはじめに、主催のデンソーカップサッカー実行委員委員長、乾真寛さんからご挨拶いただきます。

乾

皆さん、こんにちは。大学のデンソーカップ、大会実行委員会の本部長をしております、所属は福 岡大学の監督をしております乾です。よろしくお願いします。

会に先立ちまして、デンソーカップ堺大会を記念してということで、今回このようなコラボという 形でシンポジウムを開催していただくことになりました。今回特にテーマというところで、U-22 まで の育成ということで、我々大学サッカーは最後の育成、アマチュアからプロへの最後の育成を担って いると思っております。

大学の地域対抗戦という名称で、25回を数えます。株式会社デンソーさんの協賛をいただきまして、 実は本年が20年目の節目を迎えます。この間、大学サッカーは2年に1回のユニバーシアードを大き

な目標にしながら、このデンソーカップを強化の軸として、全国からの地域対抗戦と、それに続く海外キャンプ、そして韓国の大学選抜の日韓大学定期戦の3つを軸にして 25 年の歴史を重ねてきました。

昨年のアジア大会でも大学生が大活躍をいたしました。それから今日開幕しました J リーグには J 1, J 2 トータルで 1,070 名の J リーガーがいるようですけれども、その中に大卒の J リーガーというのは J 1, J 2 で 340 名います。

パーセンテージにして 33%。つまり、その国のトップリーグの 1/3 を、この大学サッカー出身者が占める状況になってきました。

そういった意味で、この大会も大きな意味を持つと思いまして、こういった企画をさせていただきました。今日は、各地域の大学サッカースタッフの皆さんも全員参加されています。

ぜひ素晴らしいシンポジウムにしていただきたいと思います。よろしくお願いします。



第1部 講演

全日本大学サッカー連盟顧問 上田亮三郎

高田 (司会)

それでは講演に入らせていただきます。

特にご紹介の必要はないかと思われますが、全日本大学サッカー連盟顧問の上田亮三郎先生にお願いしております。上田先生、よろしくお願いいたします。

上田

ただ今ご紹介いただきました上田でございます。

私は24歳で大阪商大の監督になりまして、今年で75歳になります。現場に入って半世紀になりま す。ただ、現場を10数年前に離れましたので、現場で直接指導していたのは約40年です。

その間に、何年かは忘れましたが、日本サッカー協会の技術・強化を6年ほど手伝いまして、日本の若い選手たちを海外遠征に連れて行きました。そういった国際試合も含めて、全部合わせますと、約3,000回の勝負をしたかと思います。

私は四国の愛媛県出身で、優しい感じだったのですが、3,000回も勝負をしますと、だんだん厳しい 顔になりまして、自分でも最近は鏡を見るのが嫌になってきます。

3,000 回の勝負、またその間にたくさんの選手たちに出会い、またいろんな方々に出会い、自分なりに、サッカーの指導にはこんなことが大事なんじゃないかな、ということがたくさんございます。 右に左に脱線しながら、時間の許す限りお話させていただきます。皆さんの方で、うまくまとめていただければと思います。

◆ 出会いを大事に

早速ですが、皆さんにぜひおすすめしたいことがございます。

私は指導者になりまして、サッカーに関することをみてきたり、やってきました。でも、サッカーで大切なことが 100 項目あるとすれば、そのうち 60 項目はやはりサッカーから学んできました。残りの項目は、サッカー以外の方々、政界の方々、財界の方々、マスコミの方々など、そういうスポーツ以外の方々にいろいろと出会えて、そしてそういう方々から貴重な話をいただき、学んできました。これが今の私の半分くらいになっているかもしれません。

いろいろな方との出会いは大事なんです。だから若い指導者の方々には、いろんな出会いを求め、 大事にして、自分なりのものを創り上げていくのが大事なんじゃないかなという気がします。

◆ 指導者にとって一番大事なことであり、一番最初の仕事・・・「スカウティング」

私が 24 歳で大阪に行くとき、順天堂大学の太田哲男先生に、あんた、大阪に行ったら、こういう 人(松葉さん)に会いなさい、と言われました。

私が大阪商大に行って、名刺を作り、まだそれが乾ききらないうちに、松葉さんというトレーナーの方に会いに行き、「大阪に来て、サッカーをやろうと思います。太田先生のご紹介を受けましたので、よろしくお願いします」と、挨拶をしました。

その松葉さんがおっしゃったことが、未だに耳に残っています。それは私が一番大切にしていることなんです。松葉さんが、「上田くん、スポーツ選手というのは化粧をしているんだよ。着飾っているのだ」、とお話下さいました。

最初はこの意味が分かっていなかったんです。松葉さんといろいろと 2 時間くらいお話をお伺いして、「スポーツの選手には、生まれ持ってきたものに対して、指導をしていかなければならない。スポーツをして選手になっているときは、化粧をして、着飾っているのだと。だから指導者は、その化粧を全部取ってしまって、着ているものを全部脱がして、裸にしてしまえ」と。

そして、「本当にその選手の良さだとか、欠点だとか、メンタル面、あるいは感覚、人間性の面を 掴まないと、指導はできないんだよ。うまいからといって、飛びついては駄目だよ」、という話をして 下さいました。

私もそういう話は初めてだったものですから、よく分かりませんでした。ところが8年後、32歳の

ときだったと思うのですが、優勝を1回か2回したとき、長沼健さんからお電話をいただきました。世界のサッカー連盟が初めて第1回のコーチングスクールをやると。それがアジアで、しかも開催地が千葉の検見川でやるというので、「先生参加してみたらどうですか」と言われましたので、「ぜひ参加させて下さい!」と。

そのときの受講生には、加茂周さんなどがいました。3ヶ月の合宿で、現役のときよりもえらかったです。

朝7時か7時半から朝食、9時から 10時まで講義、10時から12時まで実 技。午後は2時間休みを挟んで、実技



に講義。夜はまた21時からミーティング。それが3ヶ月続きました。

その中で、私は松葉さんに言われた言葉がすごかったということを、クラマーさんに言われて裏付けされました。

クラマーさんが、「君たち、指導者にとって何が一番大事なんだ?」、「指導者が一番最初にやらなければならないことは何なんだ?」という話がありました。

それは、クラマーさんの言葉をそのまま伝えますと、"スカウティング"です。

そのころ、我々はスカウトと言えば、野球のスカウトしか知らなかったんですね。

話を聞いてもすぐには分からないんです。ただ、"スカウティング"という言葉が、3ヶ月の合宿の中の1ヶ月目くらいで、そういうことだったのか、ということが分かってきました。

結局松葉さんがおっしゃった、"素材を見抜く"ということだったのです。素材を見抜けない、つまり、選手の長所、欠点、性格、フィジカル面を見抜けないのに、どうして選手を教えられますか、と。それは指導者は実際に指導する前に、掌握していないといけません。私は、7,8年前に松葉さ

んからすごいことを教わっていたのだなと思います。

今でも "スカウティング" を大事にしています。

たとえば、全国サッカー大会で、大会優秀選手を選びますよね。でも、大会優秀選手と将来可能性 のある選手は違う。でも、それが一緒になっているんですよね。あくまでも大会優秀選手というのは、 その大会で活躍した選手のことなんです。

それはクラマーさんも言っていました。大会優秀選手と将来の代表候補、代表選手になる人は違う のだと。

それは、しっかりと"スカウティング"をして見抜かなければならない。そういうことを教わったんですね。

そういうことが、私は指導者にとって一番大事なことであり、一番最初の仕事ではないかと思います。32歳のときに教わったので、40数年前になりますが、いろんな大会でいろんな指導者に会いますが、間違いないことだなと感じています。

企業の経営者や管理者の方々の研修会に呼ばれて、多いときには年に 40 回くらい、北海道から鹿児島まで、32 歳の時からお話しさせていただいております。その中でも特に多い話が、「人材育成」や「組織の長とは」ということで、2時間ばかり話をしております。

その中で、私自身も勉強させていただいております。それが今の私の集大成となっているのではないかと思っております。

スポーツの指導者は、私は"スカウティング"からだと。"素材を見抜く"ことだと思っております。

◆ スカウティングの次は...「いい準備」

素材を見抜いたら、次に指導者は何をするのか。何事も同じだと思いますが、私はいい仕事をしようと思ったら、"いい準備"をしなければならないと思います。

では、我々スポーツの指導者にとって、"いい準備"とは何でしょう。

ずいぶん考えました。32歳のときまでに、だいたいこんなことではないかと考えていましたが、やはりクラマーさんの3ヶ月の研修で、アジアのいろんな方々と出会って、酒を飲みながら話しながら、その中でこういうことが指導者の準備なんだなということが整理されてきました。

現時点でも、私は間違いないと思っています。 3 つございます。

まず一つ目は、「指導者自身が、自分自身の立場をしっかりと見つめる」こと。

自分がどういう立場にあるのか、どういう状態に置かれているのか、ということを見つめることです。たとえば、監督なのか、コーチなのか、トレーナーなのか。自分の立場というものをしっかり掌握する。そして、自分の立場に課せられている課題は何かを掴んでいることが大事です。

二つ目は、「素材の分析」です。"スカウティング"です。これは毎日見直してみる必要があるんですよ。

大学サッカーでは、4月に選手が集まります。そして、私は1ヶ月くらいかけて見直しをかけるんですよね。こいつはこんな欠点を持っているなと思っていても、1ヶ月も見ていると結構間違っていることがあるんですよね。

つまり、"素材の分析"をやっていく。もちろん、一人ひとり選手の良さは違いますね。生い立ちも違います。その選手一人ひとりに対しての指導の課題を掴むというのが、指導のための準備の二つ目ではないかなと思います。

三つ目は、「状況分析」です。それは私は10年くらい分からなかったんです。

状況をしっかりするということは、今の状況だけでなく、将来にわたっての見通しを分析していくんです。こういうことも、しっかりと"スカウティング"すること。

この3つの分析で、課題をしっかり掴むことが、私は指導者にとって"いい準備"が、指導のための"いい準備"ができたかどうか、ここにかかってきているのではないかという気がしております。 課題を掴んで初めて、現場の指導に入っていけます。

ところが、"指導"というのは何か。コーチングスクールでクラマーさんが我々に問いかけたことなんですが、「指導とは何をやることなのか?」、と。

私も監督になって 10 年くらいやっていて、関西でも優勝させていただいて、いい選手も輩出させてもらった。

ところが、「いい指導とは?」、「指導って何?」ということに答えられなかったんです。東南アジアから来た連中も答えられなかったんです。

クラマーさんは意地の悪い人で、みんなが答えられないと、ニコッと笑うんですね。そして、クラマーさんが、「"指導"とは、悪い習慣を取り除き、いい習慣を身につけること」だとおっしゃいました。

つまり、「教える一教わる」ではないんだと。指導とは教えるものだと思っている人は、うまくいかないときに選手に責任の転嫁をします。「ワシは教えたぞ!」と。あいつは能力が低いからだとか、普段の努力が足りないんだと。

だから「教える一教わる」が指導ではないんです。悪い習慣を取り除いて、いい習慣を身につければどんどんうまくなっていく。勉強だってそうです。すべて指導はそこに尽きるんじゃないかな、ということを我々は教わりました。

実際私はそれをベースに教えてきました。

クラマーさんの言葉ではなく、私なりに"指導"を別の表現で表しますと、指導というのはある意味では、「選手と監督、選手とコーチのいい意味での競争」。これが私の"指導"を表す表現になると思います。実際に私が50年指導の現場にいると、選手に教えられることがいっぱいあるんですよね。たとえば、大学選手権に行きまして、決勝で3回負け、準決勝で3回負けました。ベスト4に入って6回優勝することができませんでした。東京に秀英館という旅館がありまして、私たちの後援会長が、「監督、ここは方向が悪いんだと。だから、旅館を変えてみよう」、と言うのです。私はここで日本一を取るんだということで頑張ったのですけれども、決勝で3回負け、準決勝で3回負けますと、限界かなって思ったんですね。

それで秀英館にあるお酒を全部出して、どんちゃん騒ぎをしていたときに、ある選手が寄ってきたんですよね。普段選手たちは私が怖いから寄ってこないんですけど、ある選手が私のところに来て、私の前に座り、おでこを撫でたんです。みんなお酒も入っていたし、笑ったんですよ。その選手は2年生だったんですけど、私が辞めるんじゃないかと察していたんじゃないかなと思うんですよ。「監督、来年やろう!私たちは死にもの狂いでがんばります!」。そのとき私は逆に選手に引っ張られましたね。

そういったことなどを振り返って考えてみても、選手と監督というのは、いい意味での競争関係に あります。私はこれが本当の指導ではないかと思っています。

このこともぜひ考えていただきたいですね。

◆ 指導の鉄則

では、実際の指導に当たって、我々は何をすればいいのかということなんですけど、私は幾つかの 課題があるような気がしています。 私は、それを"指導の鉄則"として捉えていることがあります。

"指導の鉄則"として、まず第一に挙げられるのは、「焦らず、欲張らず」です。

なぜ"指導の鉄則"で、そういうことを考え出したかというと、何回も失敗しているんですよ。100回くらい失敗して、1回くらいしか成功していないんですよね。うまくいかないから、焦ったり、欲張ったりします。だから、「焦らず、欲張らず」ということが大事なんじゃないかなと。

皆さんも思い出していただいて、焦りすぎて、欲張りすぎて失敗したことがあるのではないでしょうか。

二つ目は、「選手に好かれようとしてはいけない」。選手に好かれようとすれば、妥協、甘え、甘さがどうしても出てきてしまいます。

ではどうすればいいのか。

"慕われる姿勢"を目指すんです。あの人は厳しい、顔を見るのも嫌だ。でも一歩下がって、あるいは時間をおいて考えてみるといい経験をさせてくれたな、いいことを言ってくれたな、と。これは "慕われる姿勢"なんです。

指導者というのは選手に"慕われる姿勢"を大事にして、好かれようとしてはいけません。これを "指導の鉄則"の一つに挙げています。

三つ目の鉄則として、「指導者が信念を持っているかどうか」ということです。皆さんは教えると きに、"信念"を持っていますか?

私はよく関西弁で言うんです。「やらなあかんことを、やらなあかん」と。雨が降っても、雪が降っても、寒かろうが暑かろうが、手段があろうがなかろうが、お金があろうがなかろうが、やらなあかんことは、やらなあかん。これを選手に徹底していくんです。

これは"信念"だと思うんですよ。こういう"信念"を指導者が持っているかどうか、いい指導に結びつくかどうか、いい素材の選手を伸ばしきれるかどうかにかかっていているのではないかと。

四つ目に、指導者にとって厳しいのですが、「結果を求めなければならない」。

結果が出ているときはいいですが、100回やって70回くらいはやはり結果は出ないですよ、うまくいかないですよ。そのときに、選手にありのままのことを伝えられるかどうか。結果を求めない指導者は駄目だと。

そうやって結果を問うことが、鉄則の中の一つに挙げたいと思います。

もう一つは、皆さん"情熱"はありますよね。でも、「情熱のバランスを取れているかどうか」なんです。

"情熱"には、この選手をどうにかしてあげたいなという"愛情"があります。それと、このチームを日本一にしたい、仕事を成し遂げたい。これは仕事に対する"情熱"です。"愛情"と、仕事に対する"情熱"のバランスが取れていることが大事なんです。

企業の方にもよく話すのですが、たとえば企業で仕事に対する"情熱"のウェイトが上がってきますと、"愛情"がなくなってきてしまいます。逆に"愛情"の方の"情熱"が高い管理職、経営者は、部下を甘えさせてしまう。伸びなくなってしまう。

この2つの"情熱"のバランスをつねに考えながら、指導をしていく必要があります。

この5項目の鉄則があります。私自身50年間大切にしてきたものであります。

◆ 選手に理解させなければならない4つのこと

では、その鉄則を分かった上で、指導者は実際に指導していくわけですが、指導者側のことだけを

考えていてはいけません。すわなち、「指導者側と選手の側を分けて考える」必要があります。選手の側の考え方は違うのです。目標は一緒なんですけど、立場が違います。

選手の方にこういうことを理解させておくと、指導しやすくなることがあります。

そのためには、選手に理解させなければならない大事なことが幾つかあるんです。それを私は 40 年間ずっと試してきて、まず間違いないだろうと思っております。

まず第一に、関西風で言葉はちょっと汚いですけれども、「お前ら、簡単なことを、わずかなことをバカにしたらあかんよ!」。

簡単なこと、わずかなことを積み重ねていくことが、1週間、1ヶ月、1年、3年と積み重ねることがすごいことを生むんだと。「簡単なこと、わずかなことをバカにするな!」と。

選手もなんでこんな簡単なことをやるんですか、と言ってくるかもしれません。でも、簡単なこと、 わずかなことをバカにしてはいけません。それを大事にしていこう、と。

これを選手が分かっているか、分かっていないかでずいぶん違ってきます。

第二に、ありがたいな、おおきに…。「感謝の気持ちをつねに抱ける」こと。

たとえば、グラウンドで2時間練習できること。大学のグラウンドですので、一般学生も使う権利 はあります。でも、そこで使わせてもらえていることにありがたいな、"おおきに"、と。そういう気 持ちでいなければなりません。ボール、用具を大切にしなさい。

食事を残す。何で食事を残すんだ、と。これは、日本の大学生の代表が検見川で集まっていときです。鈴木さんといって、東大の管理職で偉い方がいらっしゃいました。私が朝6時半ころにいたら、鈴木さんが車ですっと入っていました。いつもは10時くらいに来られる立場の方なんですね。私が、「鈴木さん、こんな早くに何しているんですか」と聞いたのですが、「先生何言っているんですか」、と。その当時、日本サッカー協会が3,500円で4,000キロカロリーの食事を出してくれとお願いをしていたらしいんですね。当然東大のスポーツセンターではそんなことできるわけないんですよ。でも、鈴木さんは、朝から市場に行って、傷物の魚を買って、帰りに畑を回って傷物の野菜を買って、チームの食事を用意しているんですよ。

その話にビックリしたんですね。早速選手を食事の前に集めてミーティングをしました。私はこれまで、「全部食べろ」、「全部食べないから頑張れないんだ」、という話をしてきましたが、なかなか徹底することはできませんでしたね。ところが、その鈴木さんの話をしたんです。「東大の管理職のすごい人が、我々のために朝早くから買い出しをしてくれている。こんなありがたいことはないんじゃないか」、と。嫌いなものが出ても、感謝して"おおきに"と、ごちそうさま、全部食べる。そしたらすごいもので、選手たちはその話を聞いただけで、今まで残していた嫌いなものを全部食べるようになりましたね。

それは感謝の気持ちなんですよ。感謝の気持ちまではいかなくても、関西弁で"おおきに"という 気持ちをつねに持っていることが大事なんですよ。

プレーの中でもそうですね。いいパスが来たら喜んでプレーする。悪いパスが来たら、何しとるんだ、と。そうするとチームワークもがたがたになりますよね。よく私は選手に言ったんですよ。11人いて、仕事は一つしかない。その仕事をお前の良さを活かしてパスをくれたんじゃないかと。少々悪い仕事だろうが、苦しい仕事だろうが、お前を信用してくれているんだと。"おおきに"と。悪いパスが来ても、"おおきに"と。そういう気持ちでおれと。そこから仲間意識とか、チームワークができてきます。

そういう意味で、"感謝の気持ちはつねに持っておけ"と。これも私は選手に理解させておく大事なことじゃないかなと思います。

三つ目は、私は「自己評価は絶対に許さない」ということです。

評価は周りがしてくれます。たとえば、仲間がします。敵がします…「あいつを狙え!」と。サポーターがしますよ、マスコミの方がします。だから"自分で評価するな"と。

私も大学で現職のとき、自己点検表を出せと言うんですよ。私は出さないんです。だから、学部長が私を呼んで、「220 数名の先生すべて出されています。上田先生だけ出していません。お願いですから出して下さい!」と。でも、「いや私は出しません、自己評価は駄目だと教えているので、出せません。私が150%で出したら、給料が150%になるんですか、ボーナスが上がるんですか」と。そんなことないんです。評価は自分でするものじゃない、周りがするものだと。

私がよく言ったのは、逆に自己評価というのは、言い訳なんだと。言い訳をするような弱い人間になるなと、これをつねに選手に伝えていました。

東南アジアに行って、日本で20度くらいの気温が、35~36度なんです。ビルマに行くと、43度で 試合をしたこともありました。熱いからへばった、熱いから食事が食べられなかった、というのは言 い訳だと。絶対に言い訳は許さんと。

これも指導をしていく上で、選手が分かっていると効果があることです。

もう一つは、「人間は年次で決まらない」。意外と考えていないことですね。



人間の価値はどこで決まるのだと。いい条件で、いい仕事が与えられる、しかも好きな仕事。これは誰でもいい仕事をしますわ。これで私はいい選手だ、いいプレーをしたとは思わない。

岡田武史や原博実につねに 言ってきたんですが、「俺はお前 を日本代表に選ぶが、それをど こで選ぶか。それは、条件が悪 いときに、苦しいときにお前た ちに何ができるのかというとこ ろでだ!」と。条件がいいとき に、いい仕事をするのは当たり 前なんです。そこで、この選手 はよくなった、うまくなったと は、私は思いません。条件が悪

いとき、苦しいときに、どれだけのことができるのか。そこで私は判断します。それが人間の値打ちだろうと。

こういったことも選手に理解させておくこと、折に触れて話すことが大事です。苦しい条件のとき、 よしやってやろうじゃないか。条件が悪ければ悪いほど立ち向かっていくこと。こういう選手を生ん でいくんじゃないかなと思います。

こういったことが、選手の問題で大事なことなんです。

◆ 指導者が持っていなければならない基本的な5つの姿勢

指導者にとってやらなければならないことたくさんがあります。

これは大事な条件です。

二つ目は、「指導者が魅力を持っていること、人を引きつける魅力を持っているかどうか」という

こと。

たとえば、あの人いい指導するな、とか、あの人なんか持っているな、とかそういうことありますよね。ところが、いい指導をする指導者はいっぱいいますよ。選手もそうですね。良いプレーをする人はなんぼでもいますよ。

たとえば、野球で甲子園に出ている選手はだいたいいい選手ですよ。いいプレーをする、いい指導ができているからといって、人を引っ張れるかといえば、引っ張れません。はき捨てるくらいいますからね。

じゃあ、人を引きつけるのは何かといえば、魅力がどこから出てくるのかといえば、私は、"その人の持っているものを全部はき出さなければならない"と考えています。あの人すごいな、あの指導はすごいな、という"人を引きつける魅力"を指導者が持っているかどうか。優しい指導、いい指導、メニューをたくさん持っているとか、そんなことは当たり前のことであって、人を引きつけられるところまで行かなければならない。

三つ目は、「一見不可能と思えること、不可能とみえていることに立ち向かっていける」ということが、強い指導者です。こういう人でないと、いい指導者になれないんじゃないかなと思うんです。 指導者が諦めて、部下や選手に頑張れと言っても、とても付いていくことはできません。

不可能なことに立ち向かっていける強さを持っている人でないと、選手を引っ張れないですね。

四つ目は、「一貫性」です。当たり前のことなんですけど、つねに"一貫性"を持っているかどうか。これも大事なことの一つではないかと思っています。

あと一つは、「勇気と決断力」です。

指導者が迷うと、選手も迷ってしまうんです。"勇気と決断"できないのは、そこには責任逃れの 気持ちが片隅にあるからなんですよね。自分のチームなんだから、自分が指導したんだから、うまく いかなかったらワシの責任、そう思えば"勇気と決断力"は出てくるんですよね。

この5項目が、どうしても指導者が持っていなければならない基本的な姿勢ではないかなと思います。

この指導者の部分で5項目と、選手の方で4項目ですが、こういうものをきちんと整理した上で、 指導に入っていくことが大事だと思いますね。

◆ 指導の3つのポイント

では、実際の指導について考えていきます。「実際の指導って何なの?」「どうするの?」ということがあると思います。

"指導"は、先ほど私が言いましたが、「悪い習慣を取り除き、いい習慣を身につけること」が大事ですが、では「具体的にどうするの?」ということになると思います。

これもクラマーさんによって整理されたんですが、先日田嶋幸三くんが、ある講演会で別の表現を 使っていましたが、同じことなんです。

私なりの表現をしますと、我々は「聴覚」を大事にしているんですね。"耳を通して教えている" んです。

ところがアジアのコーチングスクールですごいことがあったんです。千葉の小学校の児童を、1ヶ月くらいたったころに教える時間がありました。千葉の小学生ですので、日本語しかできないんですよ。だからこれは日本の指導者が当てられるな、と覚悟していたのですが、クラマーさんが最初に当てた人はタイのチャイオンという人だったんです。これはみんなびっくりしました。彼は日本語が全

くできませんからね。どうやって小学生を教えるんだって。

それよりもすごいのは、クラマーさんが、1ヶ月でチャイオンが日本語のできない人たちに、教えるのがうまいと見抜いたことなんですよね。"スカウティング"ですね。

そのときチャイオンが何をしたと思います?「動作と擬音」なんです。

「ヘイ!」、パンと手を叩く、ピシッと子どもたちが目の前に来るんです。座らせるのにどうするのかなと見ていたら、シーッとやると、みんな座るんですよ。それで30分の授業ができるんですよ。つまり、言葉以上に耳を通して教えるんですよ。言葉以上に効果があるのは、"擬音"なんです。これはあのとき私はびっくりして、チャイオンにいっぱいごちそうしてあげたんですけど、すごかったですよ、これは。

たとえば、我々も強く当たれという場面で、「強く当たれ」と言う方がいいのか、「ドン!と当たれ」と言えばいいのか。「ドン!」の方が効果がありますよね。

我々指導者は、選手の耳を通して言葉を伝えていくのですが、もっと擬音を使えばいいだろうと。 その方が効果があるなと。

"耳を通しての指導"です。特に"擬音"を考えていただきたい。

二つ目の指導の方法に、「視覚」ですよね、"目を通して教える"。

言葉だけで教えるという人もいますけど、ミーティングでしっかりと伝えたとしても、1/3も伝えることができません。だから"目を通して"、"視覚"を通して教えることです。

ただし、いいプレーだけをみせても駄目なんです。我々も若かったときは、見せて指導することができましたけど、それだけでは駄目なんです。これは、クラマーさんに裏付けしてもらったんですけど、"視覚"を通して教えためには、いいプレーも、悪いプレーも見せなければならないんです。

さらにもっと大事なのは、"デモンストレーション"ですね。"デモンストレーション"は早かったら駄目なんですよ。代表選手を連れてきて、バーっと子どもたちの前でやらす。「すごいな!」で終わるんですよ。

クラマーさんはそのとき 45,6 歳で体力も落ちていましたが、「"デモンストレーション"は遅い方がいい。だから私でも世界のトップの指導者を指導することができる」のだと。さらに、「私はいいプレーも、悪いプレーも見せることもできる。しかも、スローモーションで見せることができるのだ」とおっしゃっておりました。

これは指導方法の中で、すごく重要なんじゃないかなと思います。皆さんも指導方法の中で、考えていただきたいと思います。

もう一つが大事なんですね。これがなかなかできないです。私も 32 歳過ぎてから徹底してやっているんですけど、そのころからいい選手が出だしたんですね。

それは、「体感を通して教える」、ということです。いい味を味あわせるだけでなく、また苦い味も味あわせなければならないのです。悔しい、できなかった、くそっ、と。両方いるんですね。

この"体感"を教えるということを含めた3つで強くなっていきました。

その後、30年間私は考えました。4項目目があるんじゃないかと。

クラマーさんに4項目目があるよと言いたくて、いろいろと勉強していきました。でも、この3つ の指導法しかないだろうと思います。

この"体感"のところで付け足しをしておきます。

我々はよく練習ゲームをするじゃないですか。練習ゲームをどう決めるかというときに、私はその年によってがらっと内容が変わりました。今年のチームは調子に乗りやすいやつが多いチームだとか、今年のチームは調子に乗りづらいチームだとか、その年によってチームの抱えている選手は違うし、チームの性格が違います。

そうなると、練習ゲームの組み方っていうのが、非常に大事になってくるんです。今は当てる相手 を選んで勝たしておいた方がいい、そっちの方が何か掴みそうだとか、今はこいつら調子に乗りすぎ ているなとか。そうなったら通用しない相手と練習ゲームをした方がいいなとか。今は五分の相手がいいなとか。

"体感"で他のことがうまくいっていても、この練習ゲームがうまくいかないとご破算になってしまいます。体験上私は、練習ゲームの怖さを知っています。特に練習ゲームの大事なのは、大会前です。大会前にワンパターンでやっているところがありますよね。とんでもないですよね。そのチームの軸になっている選手、もしくは"スカウティング"をやって今年は乗せておかないという場合がある。そういうことも、ぜひお考えいただきたいと思います。

◆ 指導がうまくいく3つ+aのポイント

このように、"視覚を通す"、"聴覚を通す"、"体感を通す"、この3つしかありませんが、もう少し細かく考えていただきたい。こういったことが総合的に相まって、それが指導の効果を上げるんじゃないかなと思います。

ただ、それでもうまくいきませんよ。私も何回もえらい目にあっています。

そのときに効果のあるポイントは経験的に3つあります。実際にクラマーさんから教わったわけではなく、現場で実際やってみて、失敗、失敗、失敗だったんですけど。

まず一つ目、どうやって指導の中で、「選手に使命感を抱かせていくか」です。

選手が"使命感"を抱かないと、やっぱり苦しいときに頑張れないですよ。あるいは、企業の上司もそうです。"使命感"を抱かせること。まずはこれが大事です。

二つ目は、取り組んでいることの中に、「価値観を抱かせる」ことです。

"価値観"をしっかり抱かせながら、トライさせていく。これも私は、選手が自ら反省し、選手が自ら動いてくれること、につながってくると思いますね。

あと一つです。これが先ほど申し上げた、「体感」ですね。 いい味と苦い味を味わっていることですね。

この三つを、つねに指導者がバランスをとりながらやれるかどうかが大事です。

たとえば、原くんや岡田くん田嶋くんとかを、メキシコのユニバーシアードに連れて行ったとき、 そこの海抜が 2,800 メートルくらいだったんですよね。ものすごくえらいです。コーチングスタッフ も、東海大学の宇野先生や同志社大の古川くんでした。

まず、日本でやっているトレーニングの65%くらいで馴らしていこうかという話をしました。実際65%くらいでやってくれたんですよ。20分くらい経ったら、20人の選手の中で、鮮血、鼻血を出す選手が出てきました。打ち身も何もしていないんですよ。我々も選手たちもビックリしました。

ドクターがいたので、聞いたんですよ。「ドクター、これはどうなっているんだ?」と。すると、ドクターが、「これはドクターストップです!」と。でも、練習をやり切っていないので、ストップするわけにいかないんです。選手を集めました。ドクターに鮮血の理由を聞いたんですけど、人間の鼻の奥の毛細血管や粘膜は非常に薄く、酸素が薄いと急に血液が回りやすくなって、切れやすくなってしまうんです。

でも、これで大変だと思っては駄目なんです。たかが鼻血じゃないかと。今からちり紙を配るから、鼻に詰めてやれと。すると、岡田がいいリーダーになって、「やるぞっ!」と言ってトレーニングがスタートします。苦しい中でトレーニングがスタートし、これはシメたものだと。65%だったものが70%くらいにできるかもしれないと。

10分くらいすると、今度はしゃがみ込むんですよね。今度は私が呼ぶ前に、ドクターが飛んでくるんですよね。「監督、今度こそ駄目です!」と。でもやらなければならない。"やらなあかんことを、

やらなあかん"です。

それは脳の中が酸欠状態になっている。私もドクターも経験はないのですが、脳の中に何かを入れられたような痛さだそうです。

でも、"やらなあかんことを、やらなあかん"なんですよ。選手たちに、"やらさなあかん"です。 人間は1日1回、体力、神経すべてをフル回転させないと、100あるものが101にならないです。101 になったら、フル回転させて102ですね。あと30分やらなければならない。

そのときに、このことを思い出したんですよ。選手を集めまして、「日本中にサッカーをやっている人間は何人いるんだ、何十万人もいるんだぞ!その中から選ばれて来たんだ!期待してくれている

んだ!お前たちにはやり通す使命がある、責任がある!期待に応えなければならない!」。このように訴えました。ここで"使命感"や"価値観"を抱かせます。

すると選手が、「よし、やろうか!」と言って立ち上がって。 できるんですよね、頭が痛くて どうしようもなかったはずなん ですが。"価値観"、"使命感"を 感じさせたんですよ。

次の日も同じ体験をしているんです。2日目は90%、3日目は100%で。するとやはり1回戦は突破しました。

そういうのを見ていますと、



"価値観"とか"使命感"を抱かせていくということは、苦しい状況で乗り越えるには大事になってくる。

もう一つあるんです、苦しいのを乗り切るには。それは「本能をくすぐる」ことなんです。"本能"をくすぐることのできる指導者は大事です。

この3つのことで、選手たちは苦しい状況でも乗り越えられる。いくら高いハードルであっても、 乗り切れます。

私は指導の中で、非常に大事なことだと感じています。

◆ さいごに

最後に、そういった中で、選手と指導者が競争する中で、お互いが成長していくわけですけれども、 最後は個人個人なんです。それをチームにしなければならないんですよね。

チーム、組織とはなんですか。私はこれを企業の経営者によく問うんですよね、「組織って何なの?」 って。

我々はややもしますと、組織の中に選手を入れてしまうんですよね。たとえば分かりやすく言いますと、4-4-2だとか、WMシステムとか、昔からシステムは変わってきましたよね。3-4-3とかね。

システムの中に選手を入れたら、組織はできないですね。組織というのは、そのときそのときに指導者が抱えている選手を、いわゆる "スカウティング"ですよね、一人ひとりの選手の個性、特徴、長所、これを活かすために組織があるんですよ。

毎年同じシステムでやっているチームはあり得ない。選手が替わりますからね。組織は、守り方も 攻め方も、一人ひとりの長所を活かすためにある。また、欠点をカバーするために、今年はこれが一 番合っているな、と。

それが組織づくりの中で一番重要です。

私が今の日本のサッカーを見ていまして、そこがちょっと怖いなと思っていますし、心配しています。

組織というのは、一人ひとりの長所を活かしながら、欠点をフォローする、そのための組織なんです。そうする中で、私はいいチームができてくるんじゃないかなと思います。

話したいことの1/10も話していませんが、時間がきてしまいました。

だいたいそういったことが、私が大事にしてきたことです。皆さんもぜひトライしてもらいたいなと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

第2部 シンポジウム

コーディネーター挨拶

サロン2002理事長 中塚義実

高田 (司会)

これからシンポジウムに入らせていただきます。

まずはじめに、サロン2002の理事長で、本日のシンポジウムのコーディネーターの中塚からお話をさせていただきます。よろしくお願いします。

中塚

皆さん、こんにちは。本日はお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。今から第2部のシンポジウムを始めさせていただきます。

冒頭、乾さんより、この会全体に関わるご挨拶をいただきました。ただ、その中で、もう一方の主催者であるサロン2002とは何かと、もしかしたら疑問に感じられている方もいらっしゃるかもしれません。

そこで、簡単にご紹介させていただいてから、シンポジウムの中身に入らせていただきます。



ホチキス留めの資料の1枚目の裏側 (参照:本報告書P.5)に、このネットワークがどういったものなのかを簡単 に記しております。

成期のサップ (U-16世界ス 生のお話ではないですけど、この国のサッカー/スポーツを何とかしよう、サッカー/スポーツで何とかしようと考えている人々の、全国ネットワークです。どなたでも入会することができます。実は今回の演者でいらっしゃいます黒田先生、松田先生も会員でいらっしゃいます。

サロン2002は毎月月例会をやっ

ており、年に1回公開シンポジウムを開いています。今回の企画をサロンの観点で言いますと、年に1回の公開シンポジウムということになります。ただ、これまでは少人数で細々とやっていたんです。2005年にドイツからクラマーさんをお招きしたときも、こんなには集まりませんでした。サロン史上最大の参加者で、今日この堺で、デンソーさんの特別協賛のもと、会を開けることを非常に嬉しく思っております。

お手元の資料の一番後ろの裏側(参照:本報告書P.8)をご覧いただけますか。

今年度は、皆さんもご存じの通り、ワールドカップイヤーでした。そこで、今年度の月例会のテーマの一つを「南アフリカ・ワールドカップ」としました。しかし、トップレベルだけを見ていてもしょうがないじゃないかということで、もう一つ、「育成」ということを柱に据えて、何回か月例会を開きました。

月例会の中身はHP (www.salon2002.net/) にアップされていますので、どなたでもご覧いただくことができます。

今回は、その月例会でずっと取り上げてきた、「育成期のサッカーを語ろう!」シリーズの一つの集大成です。と言いましても、もちろん終わりがあるわけではありません。あくまでも中間報告ということになります。皆さんと一緒に、大学の指導者の方々も一緒に、育成期を U-22 の年代まで広げて、もちろんそこまでが育成だと思うんですけど、残り2時間議論できればと思います。

どうぞよろしくお願いします。

それでは、演者の方をご紹介させていただきます。

詳しいご紹介は不要だろうと思いますが…。

まず、びわこ成蹊スポーツ大学の教授であります、松田保さんです。(参照:プロフィール詳細は、本報告書P.6)

次に、こちらも改めて詳しく説明するご紹介する必要はないでしょう。現在はヴィッセル神戸の育成副部長をされています、黒田和生さんです。(参照:プロフィール詳細は、本報告書P. 7)

もうお一人は、日本サッカー協会ナショナル・コーチングスタッフで、U-22 日本代表監督の関塚隆さんですが、今こちらに向かっております。今日はJリーグの開幕日。ちょうど大阪ダービーを観戦されているので、終わってすぐ、こちらに移動されています。もうじき到着される予定です。

このセッションの進め方ですが、お手元の資料の6,7ページをご覧下さい(参照:本報告書P.9)。大きな柱として、"競技力向上"の部分。そして、もう一つは、競技力だけではなくて、"幅広い人材育成"の二つの柱で話を進め、最終的には、大学サッカーではどうするべきか、どういう方向に進んでいくべきかということを、全体で議論したいと思います。

大きく前半戦と後半戦に分けて、前半はキッズから U-18 年代における育成についてということで、 松田さん、黒田さんにそれぞれ 20 分くらいずつお話いただき、それを受けた形で全体で議論したいと 考えております。

そして、後半戦で関塚さんに、U-22 年代における育成年代についてのお話をいただいた後に、またそのことについて全体で議論したいと思います。最後に、延長戦と書いてありますが、大学サッカーは何をすべきか、ということを皆で話し、たぶんその途中で時間がなくなると思います。そして、そのまま懇親会に流れ込もうという魂胆です。

それでは松田さん、よろしくお願いします。

キッズから U-18 年代における育成について①

びわこ成蹊スポーツ大学 松田保

松田

こんにちは。中塚さんからオファーをいただきまして、こういう席に乗らせていただきました。 先ほど、上田先生の講演を久々に聴かせていただいて、懐かしく思い出しながら聴いていました。 ここに多くの高校の指導者もいらっしゃいますけど、年に何回も大商大に通いながら勉強させていた だいて…。ただ、上田先生とお話しする時はほとんど酒を飲んでいたので、ホテルに帰ってからもう 一回メモを取るんですが、忘れてしまうんです。それで今日は改めて上田先生のお話を聴き指導者と して、再度モチベーションを上げている次第なんです。

私は 33 年間高校 の指導者をしており ました。約30年間く らい大商大に通って いたと思います。そ の後、大学の方に8 年間いるのですが、 私の話していること はすべて上田先生の 受け売りだと思って いただいても結構で す。そのくらいたく さんのことを、私は 上田先生から学びま した。指導者として、 選手の育成法につい て、いろいろなこと を学ばせていただき ました。



今日はその中で、私はユース年代の監督をさせていただいたことがあるのですが、そのときにも上田先生のところに、代表のオファーがあってと相談させていただいたのですが、「日本のサッカーのために頑張れ!」と言われて引き受けることにしました。

そういう貴重な経験をさせてもらったので、その経緯ですとか、そこから私自身が感じたことを皆 さんにお話ししたい思います。

◆ 黄金世代の育成 ~世界スタンダード~

この写真(図1)は、ドーハの悲劇があったちょうど1年後に、同じカタールのドーハでこのチームを率いて優勝しました。前にあるカップは、優勝してもらったものとフェアプレー賞でもらったものです。大仁さんが団長でした。顔も見て分かりますかね。

図1 U16アジア大会('94. 11. 5カタール・ドーハ)



これは(図2)同じ年代ですけど、U-16のメンバーを春休みに、ブラジルのサンパウロとリオ、それからペルーとエクアドルに遠征に行きました。このチームは、日伯修好 100 周年記念のサッカー使節団でもあったのです。

2002年の日本ワールドカップに、アベランジェ、それからテシェイラの1票を取るためにこのサッカー使節団が行ったのです。もちろん長沼さんも岡野さんも来ておられました。こういうパーティー

図2 U16南米遠征('95. 3. リオ観光)



に私も含めて招待していただきました。そういう特別な時代のメンバーですね、2002年ワールドカップ招致の。

いわゆる黄金世代と言われたときのメンバーですね。あとで詳しく紹介します。

Jリーグが発足したこの年代は強化費がたくさんあったので、このチームは海外のいろいろな世界を見させていただいたんです。彼らは、中学校2,3年生だったのですが、この年代で世界を見られたことは、彼らの将来にとって大変大きなことだったのではないかと思っています。

○世界スタンダード

「Think Globally , Act Locally」、世界を見て、日本で活動をしようと。

次は宇宙飛行士の言葉ですが、「地球を外から見ることによって、人生観が変わった」。彼らの人生観が変わったと思います。宇宙からは見ていませんがね。日本を出て世界を見たということでは、この年代で非常にインパクトがあったことだと思っています。

これは松下幸之助さん



世界スタンダード

Think globally Act locally

「地球を外から見て人生観が 変わった」(山崎直子宇宙飛行士)

「百聞は一見に如かず 百見は一験に如かず」 10代の世界観が人生に最も大きな影響を与える 人間は環境の動物であり習慣の奴隷である 地域でのキッズからの一貫指導の確立 基本的生活習慣の確立 自主独立(井原・長友) 学ぶ身体つくり 自己教育力 クリエィティブ 人間力 トレランス(耐性・寛容) 対立・孤立一平和・共生

の言葉だそうです。我々は「百聞は一見に如かず 百見は一験に如かず」ということで、実際に聞くよりも見ることが大事なんですが、先ほど上田先生がおっしゃった "戦う" という経験を通して、いろんな学びをしたと思います。10代の世界観ですとか、後ほど育成のフィロソフィーにかかわる、非常に大きな影響を与えられたのではないかと思っております。

先ほど上田先生もおっしゃっておられましたが、いい習慣、いい環境をいかにつくるか、与えられるかが、育成の最も重要なポイントだと思います。

それは今日のテーマでもありますキッズからの一貫指導は、とにかくグローバルスタンダードを 我々がしっかり見た上で、どうやって段階的に指導していくべきか。こういったことをそれぞれの地 域で、また日本全体でしっかりと把握していかなければならないと考えています。

ちょうど 2003 年、日韓ワールドカップが終わった後、キッズプロジェクトというのが立ち上がりましたけど、ちょうど私が大学に行った年でしたので、これに1年目から関わっています。私の大学での学びの一つのテーマでもあります。

基本的生活習慣というのは当たり前のことなんですけど、先ほど上田先生もおっしゃっておられましたが、"当たり前のことを当たり前のようにやる"のは非常に難しいことで、基本をいかに徹底させられるか。サッカーの基本、生活の基本は一緒だと思います。それで初めて自立した、独立した選手である、人間であると言えるでしょう。

守山高校時代に指導した指導した井原正巳という選手と、よくは知りませんが長友という選手は、 サッカーマガジン等で読んでいますと、今一番興味のある面白い選手です。

私は大学でコーチ学を教えているのですが、そのキーワードの一つに「学ぶ身体づくり」がありま

す。言い換えると、自己教育力とか、クリエイティブな生き方とか、人間力です。その根底にあるのは、先ほど上田先生がおっしゃっていた、"tolerance" (寛容) という言葉です。

しんどいときにどうするかによって人間の真価が問われるといいます。クラマーさんやオシムさん、 上田先生のように、戦いの中で数多くの修羅場をくぐられてきた方は、"度量が深い" 磨かれた人格 を持っておられます。指導者として我々もそういう度量の深さを持たなければ勝負に勝つことも選手 を育成することもできません。もちろん選手も同様です。"耐性"があるからこそ、"寛容" という度 量の深さが身に着くのだと思います。

こういう力を持っていると、人間は人生において対立や孤立する場面がいっぱいあるのですが、耐性や寛容が育つことによって社会性やチームワークが育成され、対立・孤立から"共生""融和""平和"という豊かな文化を創り出してゆくはずです。

○U-16 世界スタンダード

今日のテーマ、私の副題ですが、 このチームを預かったときに、この 年代で世界スタンダードの力をつけ ないと、世界では戦うことはできな いなということを、私は体験しまし た。

アジアでは優勝しましたけど、世界では通用しませんでした。詳しくは言いませんが、ガーナに0-1で完敗。アメリカには2-1でやっと勝って、でもエクアドルには日本が力では上だったのですが0-0で引き分けました。とても世界スタンダードだったとは言えなかったです。

次につながる育成年代の指導と

U-16世界スタンダード

(93年次に繋げる選手の育成指導-U15代表監督規律の遵守 自立 メンタルT(気性・感性・知性)オフトの10項目ーオランダ育成年代のディスプリン U16アジア初優勝 U17Wユース U20準優勝 U16ブラジル 2-1 U16日本の衝撃(マラカナン)サッカー大国 = ユース年代の育成フィロソフィー子供幸福度世界ーオランダ(自立・多様性の国)個と社会性の育成(人格の両輪)個別教育(育成大国)人口1500万人・国土4万K㎡・1万以上のピッチT(技術)I(知性)C(コミュニケーション) TIPS

いうことで、私は代表監督を引き受けたのですが、当時強化委員長の川淵三郎さんに、「4つのカテゴリーすべてアジアで勝ちに行け!」と言われて、びびっていましたが、何とかアジアは勝てたんですけど、とても世界では歯が立たなかったというのが、私の印象です。

チーム作りとしては、先ほど上田先生もおっしゃっていた、簡単なこと、基本的なこと、ピッチ内外での規律の遵守を、私自身も上田先生から学びながら、高校でもそうでしたけど、難しいことは言いませんが、簡単なことは絶対に守ろうと。そんなことで、ディシプリンというものを徹底していきました。

そこで自立を促す手助けとしてメンタルトレーニングを取り入れ、先ほど上田先生がおっしゃっていた本性とか気性とか潜在能力をいかに引き出すかということを、メンタルコーチとして豊田一成先生にお願いしました。

井原とか長友などは、ものすごい気性をしていると私は思います。井原は私が出会った中で一番気性の激しい選手でした。そういう激しい気性によって感性と知性が発達するものと私は思っています。その激しい気性のコントロールの仕方、勉強の仕方によって感性と知性が磨かれると思うんですけどね。だから、知性とか感性を磨く前に、上田先生もおっしゃったように、"本能"。"本性"をいかに引き出すか、それが一番重要だと私も考えています。

私が代表監督をしたときのトップの監督がオフトでした。オフトの下でコーチをしていた清雲さんの講義があって、オフトの10項目というものを学びました。

サッカー大国オランダの育成のフィロソフィーとして有名です。オフトはオランダのユース育成デ

ィレクターをやっていたので、ユース年代までに徹底させるというディスプリンがオフトの 10 項目です。もちろん日本代表でも彼はそれを徹底しました、このオランダの育成年代のオフトの 10 項目のディシプリンを、私も U-16 チームの基本戦術として徹底しました。

上田先生と話をしたことがあるのですが、クラマーさんが言っていることと何ら変わりません。でも、一番分かりやすく簡潔に表現されていると私は思ったので、このオフトの10項目をチームのディシプリンとして採用しました。

アジアで優勝し、1997年エクアドルでの世界大会に行ったんですけど、予選で敗退しました。ガーナが2回目の優勝をしました。本当かどうか知りませんが、ガーナの出生はよく分からんと。髭をいっぱい生やして、2、3歳上とちゃうかな、という話もありました。当時ブラジルユースが非常に強かったんですけど、決勝で3-2でガーナが優勝しました。

そのとき、シャビとかいたスペインも日本も予選で負けているんです。でも、次のナイジェリアの U-20の大会ではトルシエが監督をして、日本が決勝まで行って、スペインに0-4で完敗しましたね。 小野伸二が累積警告で出ていませんでしたけど、スペインと日本が決勝を争いました。おそらく日本 代表としての最高の成績じゃないですかね。

スペインは、この前のワールドカップで世界一になりましたけど、日本はそうはいかないというのが現状です。



日伯修好 100 周年記念のサッカー 大使として、ブラジルのリオに行っ たときのものなのですが(図2写真)、 そのときマラカナンで U-16 のブラ ジル代表と戦いました。

U-17 世界大会で準優勝したブラジルですね。ラスト5分まで0-2で完敗でした。手も足も出ませんでした。ここに中学年代の指導者の方がいればよくご存じだと思うのですが、U-15、U-16年代のブラジルと日本のチームが試合をやったらこてんぱんにやられます。

滋賀県の中学選抜がいつもブラ

ジルに遠征に行くのですが、5点から10点くらい放り込まれます。それくらい力に差があります。今は国体がU-16化しましたので、受験期、中学校から高校の狭間でのギャップがだいぶ埋まってきたと言われているのですが、90年代はまだそういう時代じゃなかったので、全然手も足も出なかったです。残り5分でカウンターで何とか1点取って、その後シーソーゲームになって、同点にするチャンスが2回くらいあったかと思うんですけど。

でも、とんでもない差があるなということを感じて帰ってきました。これも非常に大きな収穫だったと思います。

◆ 育成年代のフィロソフィー ~オランダを中心に~

この前、この中にも大分のサッカーカンファレンスに行かれた方も多いと思いますが、我々が目指すサッカー大国、世界のベスト 10 の国は、育成年代のフィロソフィー、コンセプトが非常にしっかりしている。スペインもそうです。明日から私は大学のチームを連れてバルセロナの方に遠征に行くので、そういうものを学びに行きたいと考えているのですが、日本では育成年代のフィロソフィーやコンセプト、先ほど上田先生がお話しされたことを共通理解としてみんな持っているか、やっているかは、ちょっと疑問に思います。

だから、世界のベスト10にはまだまだ行かないんじゃないかなと。

ちょっと話は変わりますが、オランダの話をします。スペインが優勝したのでスペインの話題が持ち上がっていますが、ファイナルに出たオランダはトータルフットボール発祥の地ですが、世界のサッカーを大きく変えたサッカー大国ですけど、この前の新聞に、「子どもの幸福度世界一オランダ」という記事が出ていました。日本の子どもの幸福度のランキングはものすごく低かったです。

元々オランダという国は子どものときから自立を促して、そしてサラダボールの国と言われているように、早くから多様性を認める国だと言われています。育成や教育のフィロソフィーがしっかりしている国だと思っていましたが、"個の育成"と、"社会性の育成"を大変重要視しています。先ほど上田先生がおっしゃっていた「組織とチーム」、「長所と短所」を組み合わせてどうやって融合させるかだとか、人格の両輪としてバランス良く指導してゆくことが重要だと新聞に載っていました。

上田先生が先ほどおっしゃった "個別教育"ですよね。私は高校の教員でしたが、個別教育は非常に難しいです。個々の、一人ひとり選手を見ていると全く違うのですけれども、それを一人ひとり個別に丁寧に育成していくというフィロソフィーがまだ浸透していないと、私自身は感じています。指導者の質・量ともに育成大国にはまだまだなれないと。

オランダは人口 1,500 万人で、国土は日本の 11%で 4 万 km^2 ですが、でも 1 万以上のピッチがある。日本はちゃんとサッカーのできるグラウンドは、1,000 くらいしかないそうです。 1/10 しかピッチがないんです。国土はオランダの方が日本の約 1/10 しかありません。人口も約 1/10 くらいです。

これも皆さんよくご存じの、"TIC"とか"TIPS"で、オランダ、アヤックスが言っていることですよね。「技術(T)とインサイト(I・知性)とコミュニケーション(C)」。これがサッカー選手として重要視されているオランダのフィロソフィーです。

日本でも同じことなんですが、田嶋幸三さんが『「言語技術」が日本のサッカーを変える』など発信していますし、当然我々もそういうことを頭に入れて指導していると思いますが、まだコミュニケーションの部分でもまだまだ足りないんじゃないのかなと思います。

◆ おわりに ~井原と長友のキャリアから見えること~

最後に、井原選手と長友選手の話をして終わります。

井原は守山高校で3年間指導した選手です。今は柏のコーチをしているのですが、三男坊です。代表キャップ122で、今のところ一番です。長友と共通して面白いのは、ユース年代でディフェンダーにコンバートされたということです。

彼はディフェンダーにコンバー トしていなかったら、日本代表には いっていないと思います。元々井原 アジアの壁 井原正巳 守山高・筑波大・マリノス・ジュビロ・レッズ 三男 日本代表仏W-CUP主将 CAP数122 ユース時DFコンバート 大学2年日本代表 入り 無事是名馬 NHK解説 北京五輪コーチ 柏コーチ

はセンターフォワードやオフェンシブハーフをやっていたのですが、おそらくそのままだったらこのような実績は残していないです。

長友も同じですね。大学の2年のときに、関東の方はよくご存じかと思うのですが、ディフェンダーにコンバートされて、たった何年間か分かりませんが、それから急に世界の長友になり…。

こんな選手は見たこともないのですが、天井効果というのですか、一つの壁をどんどん突き破って

いく選手です。いわゆる黄金 世代やプラチナ世代と言われ ている天井を次々と突き破っ てゆく世代の選手が、日本に はたくさん出てきていると思 います。

長友の体脂肪率が5%で、 男子のマラソン選手の平均が 7%ですから、彼の数字とい うのは驚異的なんだそうです ね。極限までストイックに自

シンデレラボーイ長友佑都

東福岡高・明大・FC東京・チェゼーナ・インテル ユニバー 北京五輪

日本代表(39) 母子家庭 3人姉弟 大学2年DFコンバート 体脂肪率5% 世界のスピードスター SBアタッカー

分を追い込める選手である。井原も自分に強いというか、目標を定めたら、妥協しないというすごい 選手だったのですが、自分に打ち克つ激しい気性の世界スタンダードの選手が日本にどんどん出てき たら、日本の未来は明るいのではないかと思います。

中塚

ありがとうございました。U-16の代表監督をされたご経験、さらに井原選手、長友選手あたりのキャリアから見えてくることをお話いただきました。

ありがとうございました。

キッズから U-18 年代における育成について②

ヴィッセル神戸育成副部長 黒田和生

中塚

次にヴィッセル神戸育成副部長をされております黒田和生さんにお話いただきます。皆さんご存じだと思いますが、長年滝川第二高校で指導され、現在はヴィッセル神戸育成副部長をされております。 よろしくお願いいたします。

田黒

皆さん、こんばんは。先ほど上田先生が検見川でコーチングスクールを3ヶ月受講され、ヒーヒー言っていたと言っていたその時、私は20歳の学生で、遠い雲の上の人たちの頑張りを現地で見ておりました。



サロン2002の会と は、大谷四郎という朝の運動部長力が、神戸フラブ(以下子で技術をしたりで技術を受している。 下C)で技術を受して、大谷四郎の思いけいに、大谷四郎の思いけいというをした。 ではいいた。

私は大学を卒業してす ぐ、神戸FCというとこ ろに入ったのですが、毎 日が驚きの連続で、ここ

にいらっしゃる賀川浩さんをはじめ、戦前の神戸一中、三中、関学あたりの強者、すごい人たちにサッカーを教わりました。私の相手にしているのは、小学生とか幼稚園生で、靴紐の結び方を教えているような毎日がありましたが、自分のコーチの人生の中では、大変いいスタートが切れたなと、振り返って思っています。

◆ 学生・神戸F C 時代

そもそも私は岡山県倉敷出身なんですけど、サッカーを始めたのは中学のときで、野球部の 10 人の中の 10 番目の落ちこぼれでして、野球はしたくないと。野球以外ならなんでもいいと思っていたところに、たまたまサッカーがありまして、そのサッカーをするうちに、見事にはまったんですね。岡

山県は非常にレベルが低いもので、これは将来先生になって岡山のレベルを上げなければと、当時そんな大それたことを考えて、東京の大学を受験しました。

奇跡的に合格しまして、憧れの東京へ行ったところが、またこれが毎日が驚きの連続でした。当時 松本光弘先生が監督で、とにかくよく走らされました。あー、トップレベルの大学、早稲田大学や明 治大学のサッカーはこんなんだ、ということで、毎日が驚きというか、勉強の連続でした。

2年生から、成田十次郎先生にお世話になりまして、関東リーグで優勝するなどの体験をすることができまして、勝つということは、選手にとってすごい自信を与えることなんだということに、気がつきました。

だいぶ後になって、自信と過信は紙一重で、勝つとすぐ自惚れるぞということで、よく頭を叩かれたことがあるんですけど、とにかく若かったですから、この自信を子どもたちに伝えられたらいい仕事になるじゃないかと思って、少年サッカー指導の道を志しました。

当時部のモットー、教訓ですが、当時はサッカーがマイナーな時代ですから、「全国に一つでも多くのゴールを立てろ、それが卒業生の使命」だ、ということと、「サッカーで自信をつけられたらという思いが一緒になって、躍動しながら仕事に携われたな」というふうに思っていました。

13 年間子どもたちと一緒にやりながら、ときどき賀川さんに新聞社の近くのレストランに呼んでいただいて、世界のサッカーはね、という話を 1 時間半、 2 時間していただいて、おまけにご馳走になって、すごく刺激でした。

それが、ヨーロッパにあるクラブというクラブがスタンダードなんだよ、と。日本では学校体育なんだけどね、というところでよく薫陶を受けました。

◆ 滝川第二時代

その後ご縁があって、滝川第二という新しい学校に行く機会を得ました。これは白紙に絵を描いていくようなもので、これは何でもできそうだなって。それだけに責任も重たいんですけど。

私がずっと考えていたことは、それまでやっていた少年サッカーの大切さというか、気持ちというんですかね、素直にうまくなりたいとか、仲間と一緒にしたら楽しい、ということを高校でもできたらいいなという思いでやっていました。

幸いなことに、県大会では勝つことができたんですけど、なかなか全国の壁は厚くて、何度も何度 も跳ね返されて終わったんですけれども、辞めるといったら急に子どもが奮起して、高円宮で奇跡の 優勝だったと思うのです。

結局 23 年勤めることができました。幸い J リーガーも多くなってくれて、42 人いますかね。活躍してもらって、喜んでいるんですけれども、それよりもOBになってサッカーの指導者になっていく数に喜んでいます。 J リーグの監督はまだ出ていませんけど、学校の先生を含めて、少年サッカー、 J リーグのコーチとかスカウト、レフリーとか。そのうち国際審判になりそうな人が、2,3人いて喜んでいるんですけれども、そういう数、サッカーに関わっている数、これは日本でどこにも負けていないぞということが嬉しく、密かに自慢しております。

それは私が在任中というか、監督をしている間にしょっちゅう、「君らは将来サッカーのコーチになれ!」、とか、「携われとか」、そういうことを言い続けてきました。「目標とするのは、私。私を飛び越える指導者、私を乗り越えていきなさい」という話をよくするんですね。高すぎたらもちろん乗り越えられないけど、ちょっと頑張れば乗り越えられる目標ではないかなと思って、「私を越えるように!越えるように!」と元気づけたつもりです。その数がだんだん増えて、本当によかったなと思っています。

今はこういう立場ですけど、先ほど井原、長友、高体連OBが数も質も日本代表の中心になってい

る。それが将来クラブユースと半々になっていけるときがくるかなと思って、一般的にいわれるクラブユースに、気合いだけ入れても駄目なのはよく分かっているんですけど、もう少し心の部分を注入しながら、互角に戦える日が来ることを夢見ております。

◆ 教え子の岡崎慎司

先ほど、井原と長友が攻撃からディフェンダーにコンバートされてうまくいったという話がありましたが、私はこいつはフォワードしかできないんじゃないかという、ドイツへ行っていろいろと騒がしておりますが、岡崎というとんでもない選手がいます。彼がうちの高校に入ったときは、中学の県のトレセンレベルで、そこは30人も40人もいて、選抜ではなかったです。

高校に入って、国体では試合に出るようになったのですけれども、とてもJリーグでは無理だから 止めた方がいいという話をしたほどの選手でした。ヴィッセル神戸は岡崎をスカウティングして、地 元だから欲しいということもあったのですけれども、彼はわざわざ地元を蹴って、地元にいたらちや ほやされて、義理でも使ってくれるときがあるかもしれない、それがぼくは嫌だから、ぼくは清水に 行きます、ということで清水に行ったんです。

ぼくは、「清水は止めておけ」と彼に言いました。清水には堀田さんとか少年サッカーでいろいろとお世話になった人は山ほどいるんですけど、当時強かったのも分かっているし、でも清水はよそ者に対して厳しいぞと。だからお前は下手だから、いじめられて、いじられて終わりだと。行くんだったら他のチームというふうに話を持っていこうとしたんですけど、残念ながら清水しかオファーがなかったんです。

案の定、2年間ほど公式戦はゼロ。だけど、2年間サテライトで得点王になったんです。これはた ぶん高校相手とか、大学相手にサテライトはよくやりますよね。そのときに彼は気を抜かずに、力を 抜かずに、高校相手に6点取ったとか、大学相手に7点取ったとか、そういうことをしてきたと思う んです。

2年間得点王ということで、チャンスを与えられた。そのチャンスをうまく活かして、北京オリンピックに選ばれて、代表にも選ばれます。エーって言って、岡田さんの鞄持ちでもしてればいいじゃ

ないかとか、冗談を言っていましたが。



それから飽くなきと言いますか、とてつもない向上心を持っている。止めとけと言っても、やる!

という気持ちですね。それには本当に驚かされています。

ある程度年を取っても、テレビでしか見られませんけど、うまくなったなとか、ちょっと早くなったなとか、タイミングよくなったなとか、そういうことを感じさせる選手は珍しいなと思いながら見ています。

これからどれだけ伸びるか楽しみですし、U-15 や U-17 代表に選ばれなくてもまだまだ伸びる選手はゴロゴロいるんじゃないかなと思って、そういう選手たちを発掘して、刺激を与えられたらなとも思っています。

今日は日頃卒業生がお世話になっているところも含めて、お礼の意も込めてしゃべらせていただきました。

ありがとうございました。

中塚

ありがとうございました。滝川第二の指導経験だけでなく、神戸 FC やヴィッセル神戸時代を含めた、少年からの育成という観点でお話いただきました。

ディスカッション(1)

コーディネーター 中塚義実

中塚

松田先生、黒田先生のお話に対して、いろいろと質問があるかと思います。私もいっぱいお聞きしたいことがあります。

共通してお聞きしたいことを一つだけ。上田先生の話の中で「素材をどのように見抜くか」ということがあったと思います。今の黒田さんのお話では、岡崎選手がどういう人間だったかという部分、それから松田先生からは井原選手が、もしくは黄金世代といわれている人たちが中学のころはどういったものを持っていたのかという話がありました。

お聞きする中で、非常にメンタルの部分が多かったような気がするのですが、極端な話、メンタル次第で何とかなるものなんでしょうか。逆に言うと、幼いころはいっぱいボールに触れ、ボール扱いがうまいかどうかというところを指導の面では重視すると思うのですが、最終的に勝ち残った者が持っているものは何なのでしょうか。抽象的な言い方で恐縮なんですが、お二人の経験豊富な指導者が体験してきた、特にキッズから U-18 の年代で、先生方は素材をどのように見られていたのかということについて、ヒントをいただけないでしょうか。

松田

先ほどキッズからの一 貫指導のお話をさせていた だきましたけども、発育発 達年代でこれくらいのこと をしていて欲しいなという ことはあります。何でユー ス年代で、中学生年代でこ んなことができていないん だ、もったいないなという ことはあります。

でも高校にきてからで も、先ほどの話じゃないで すけど、下手でもそれなり のリーグを代表する選手に なるという例はたまにはあ るんです。でも、それは本 当に稀であって、先ほどの



学ぶ力とか、人より努力したとか。高い目標を掲げて、すさまじい努力をして欠点を克服し、更に大きく成長した選手はたくさんいます。

メンタルトレーニングの中で目標の設定というのが一番大事なんですけど、本人が高い目標を掲げ、 またいろんなアドバイスを受けたときも含めて、目標に対して何が何でもやり通すという強い力があ れば、一貫指導の中で、初期ではそれほどうまくいっていなくても、大きく育つことはあると思って います。 ただ、どんな選手でも大きく育つ可能性はあるのですが、スムーズに大きく育成していくためには、 もっと合理的なシステムが必要なんじゃないかなと、私は思っています。

田黒

私が神戸F C時代に考えたこと、教わったことですが、「なるべく早くサッカーを始めて、なるべく遅くまで」、という教えなんです。これもクラマーさんの言葉だと思うのですが、テーマがありまして、みんなが早く帰ってしまうと、クラブ員がいなくなって、会費が集まらないと。これは普及のためにもよくないし、というところでどうしたら続けられるかということを考えなさいと言われたんですけど、そのために一番必要なことは"うまくさせること"だと。たとえば、ボールリフティングが、3回が10回できたとか、「うまくなったね」と言われることが続けるための秘訣だと。

同級生よりうまくなって試合に出たら、それは楽しみ。ちょっとだけ人より天狗になる。ぼくは算数嫌いだけど、算数ではあいつに負けるんだけど、サッカーではちょっと勝っている。そんなちょっとした優越感というんですか、そういうことが長続きするために大変重要なことじゃないかなと思います。

サッカーはチームゲームという要素でありますので、仲間との人間関係が同じくらい大事かもしれませんが、子どものときには個人主義としての自分がうまくなるということが大変重要な要素だと思いますし、でもこれからのサッカーは、短距離も走れて、長距離も走れて、両方走れないと、というためには"走る"という要素がすごく重要かなと思ったりもしています。

中塚

ありがとうございます。

関塚さん、いかがですか。後半戦でU-22のところをお話いただくんですけど、それまでのU-18年代、つまり U-22 に入る前にこういうことを身につけていてもらいたい、あるいはこういうことができる選手が今後伸びてくるぞ、ということがありましたら、関塚さんの観点でお話いただければと思うのですけれども。いかがでしょうか。

関塚

ぼく自身は 1991 年から指導者の方に身を置いたわけですが、自分の経験からもサッカーには技術が大切だなと、ぼくはつくづく思っています。今走るという要素が重要視されていますけど、やっぱりサッカーというのは技術だと。足で扱うスポーツという意味では、技術が非常に大事だと感じています。その中で、スピードがどんどん上がってきているので、ボールがないところでの判断というところとも、要素としては含まれてきています。

ぼく自身小学校時代にボールの扱いがうまくなっていたらなと、ぼく自身の経験からも身をもって 感じていることなので、そういう意味ではボール扱い、技術というのは大事です。蹴ることというの はぼく自身も好きで自信がありましたが、ボールを自由に扱って、フォワードとしてドリブルで抜く という技術というのは、小学生時代にぼく自身もっとやっておけばよかったなという思いを持ってい ますし、一対一に強い、抜く力が強い選手は守備もうまいなと、ぼくは思っています。

中塚

もう一度松田さんですが、黄金世代と言われる世代を U-16 のところで見られたわけですが、いま

技術の話がありましたが、あの世代は中学の時点ですでに特別なものを持っていた、特別な世代なんでしょうか。それとも、あの世代はたまたま、ワールドカップの招致活動もあったからかも分かりませんが、世界で勝っていくための経験を積むことができた。いい素材を持つ者がいい経験をできたから伸びてきたと考えられるのでしょうか。そのあたりをちょっとお聞かせ願いませんか。

松田

先ほど環境と習慣で人はつくられるという話をしましたけど、彼らはいい環境の海外に行く機会が 多くあり、いい習慣をつけられるチャンスが多くあったと思います。

素材的には、小野伸二や山崎光太郎というのは、あの時代の日本ではこれだけうまく、ボールタッチが柔らかい選手は、私が見ている限りではいなかったですね。私にとっても驚きでした。静岡の方々はよくご存じだと思うのですが、幼稚園の頃から家の壁に向かってもくもくとボールを蹴っていたと。10人兄弟の6男坊ですから、むちゃくちゃハングリーで、高い目標を持っていましたし、メンタルトレーナーが彼の将来の目標を書かせたところ、将来日本代表になってワールドカップに行くって書いてありました。

そういう中学校2,3年生の年代でそういう夢を持てた年代でもありましたね。Jリーグが発足した年でもありましたし。ドーハの悲劇で日本が負けたというときに、おれらの年代が行くんだとか、そういうことを明確に持っていたということで、そういう面では非常に恵まれた環境、背景にあったと思います。

中塚

ありがとうございました。

それでは、フロアの方々から、前半部分に関して、キッズから U-18 に関してのご質問、あるいはトピックのご紹介でもいいんですけど、どなたでも結構です。いかがでしょうか。

岡本真

失礼いたします。岡本と申します。

松田さんにご質問なんですが、U-16の世界大会に黄金世代が行ったときに、ガーナに0-1で負け、エクアドルには日本の方が力が上だったけど引き分け、アメリカには2-1で勝ったと。けれども世界との差が非常にあると。

ワールドスタンダードには差を感じたことを持ち帰ったという中で、この年代で黄金世代において 世界との差を具体的に挙げていただけるとすれば、どんなものが挙げられるでしょうか。

松田

私自身基本的なことしか教えないのですが、その基本的なことを徹底させるというコンセプトで戦ってきました。基本的なことを徹底して戦いに臨んだのですが、たとえばガーナとかブラジルなんかはその基本的なことにミスがない。そしてハードに、実践的にそれがどの選手もできるということで…。発育発達も違うし、プロの世界というものをブラジルなんかは上にずっとみてきている中で、ここで自分たちが頭角を現せなかったら上に行けないというハングリーさはすごく感じました。

終了5分前までワンサイドゲームで、何もすることができなくて、あのときのブラジル戦の衝撃は、 大変ショックでした。だから、この差を埋めるのにどうすればいいのかということを、私も選手も感 じたと思いますし、ガーナの試合も一方的にやられて、なんとか耐えられていたのですが、最後の最後に1点押し込まれて、0-1で負けました。2年前に優勝していたので強いのは分かっていたのですけれども、発育発達の面でこんなおっさんみたいな選手がU-17の選手かというのがいましたけれど。

ブラジルに関しては間違いなくうまくて強かったです。これが世界のトップトップなんだと思っていましたから、あそこに追いつくためには、彼ら自身も相当頑張らなあかんし、日本のサッカー界も頑張らなと。本当に基本的なところでミスがないです。我々も基本を徹底しましたが、まだまだ基本的な所でさえミスが多く、まだまだ完成度は低かったですから。

そういう部分でサッカー大国といわれる国の育成システムはすごいな、ということを感じてまいりました。

岡本真

ありがとうございます。

もう一点、今のような U-16、U-17 年代を含めフル代表においても、世界との違いというところで、技術的な部分でミスが少ない、それからフィジカル面、ハングリーさなどメンタル面なども取り上げられてきます。そういった中で基本の差、それから育成の徹底の差であるとか、先ほどもありましたけれども、ヨーロッパのTICとかTIPSのように確立されて、言葉としても整理されていると感じるのですけれども、ブラジルであるとかアルゼンチンのような国で育成の中で徹底されているものもゲームの中で感じることができたのでしょうか。

また、そういったものを日本のサッカーの育成の中で追いつけ追い越せという中で、どんなことが 今後の課題として考えられるでしょうか。

松田

大変難しい質問ですが、私が聞いている、学んでいる部分で、各国のクラブチームにそれぞれ育成のフィロソフィーがあって、そのトップにそのフィロソフィーを具現化している人たちがいて、育成はそこに行くまでの過程です。バルサなんかは、カンファレンスでも、バルサの育成がバルサのサッカーを支えているという言い方をされていましたけれども、そういうコンセプトが日本にあるのかなと。日本の育成において、中学、高校、大学と別れてしまっていて、上につながっているコンセプト、フィロソフィーが次のサッカーにつながっているかというと切れてしまう。

Jリーグは持っていると思うのですけれども、そういう意味で、日本の一貫指導はまだまだシステマチックになっていないなと。ブラジルならブラジルの一つのクラブチームの中で、上に行くためにはここでこれを絶対にしておかなければならないということがあって、それをすごいレベルでやっているのを、ユース年代の子どもたちが見ているのだろうと私は思います。

中塚

黒田さん、いかがですか。

黒田

今クラブチームの話が出ました。今クラブチームは、それを一所懸命心がけているところです。一つのコンセプトを持って、上から下へやろうと。

そこでのキーワードは、私は"コーチの資質"と、能力だと思っております。選手の能力は数年前よりも数段高いし、たとえばユースでは高い能力を持った人が選ばれています。ジュニアユースでも素晴らしいです。

あとは、伸ばせるかどうかは指導者の力が大きいと思うので、指導者には、うちで言っていることは、「サッカーを知ること」です。だからトップチームの試合や練習をよく見に行くようにと。ユースのコーチはジュニアユース、U-15、U-12 の試合を見るようにと。U-12 のコーチはユースの試合を見るように、トレーニングを見るようにとやかましく言っています。それは昔神戸FCで教わったことなので、別に珍しいことではないのですが。あとは上田先生がおっしゃってくださったように、人間学ですか、「人間を知ろう」ということも言っています。人間についてもっと知らなければならないだろうということで、ヒントを与えながら取り組みかけた、というところですかね。

中塚

はい、ありがとうございます。

まだ他にもいろいろとお聞きしたい方がいらっしゃると思いますが、そろそろ後半戦に入らないと 延長戦の時間もなくなってしまいますので、次の年代に話題を移したいと思います。

U-22 年代における育成について

日本サッカー協会ナショナル・コーチングスタッフ/U-22 日本代表監督 関塚隆

中塚

高校を卒業して、一つは能力の高い選手はそのまま J リーグへという道があります。もう一つの選択肢として、長くこの国の歴史は大学が非常に大きなウェイトを占めてきました。冒頭での乾さんからのお話の中で、 J リーガーが 1,070 名いる中で、そのうち約3割が大卒の選手だという話もありました。

次は U-18 から U-22 ということで、代表チームを率いている関塚さんに、主にこの年代のことを中心にしながら、お話いただければと思います。

それでは、よろしくお願いいたします。

関塚

皆さん、こんばんは。ただ今ご紹介いただきました関塚です。 すみません、この研修に遅れてしまいまして。また上田先生のお話も聞くことができませんで。今日Jリーグが開幕して、J1のガンバ大阪とセレッソ大阪の試合を視察してきました。 残り5分で出てきたんですけれども、間に合わずに申し訳ございませんでした。

ぼく自身も去年の9月からサッカー協会と契約しまして、今年の6月から始まる U-22 のロンドンのオリンピックの代表監督に就任しました。チームの



立ち上げは、昨年11月に行われたアジア大会だったんですけど、その節は大学の指導者の皆さんには 一番大事なときにご協力いただきまして、ありがとうございました。この場をお借りしてお礼を申し 上げたいと思います。

そういう縁もあって、ここで22歳以下の指導についての話をして欲しいということで参りました。

◆ 現役時代、そして指導者へ

少しぼく自身のこと、現役時代のころからのお話をします。ぼくは千葉県船橋市出身で、峰台小学校、宮本中学校。サッカーとの出会いも、小学校5年生のときに、船橋の峰台小学校にはちょうどサッカークラブがあって、そこに5,6年と入部できるということもあって、そこからサッカーにのめり込みました。そのときの指導者の中で、一番厳しくやってくれたのが国士舘のラグビーの先生で、

非常に走らされてハードだったというのを覚えています。ぼく自身非常に足が速かったので、フォワードとしてそこで点を取りながら、クラブも船橋市で優勝するなどもあり、小中とサッカーに没頭していきました。

そして、高校では千葉県の八千代高校で青木先生と出会いまして、インターハイで高校3年のときに決勝で北陽高校に敗れたんですけど、準優勝。それに高校選手権もベスト4でした。国立で古賀一高に負けたところで、高校サッカーは終わりました。

サッカーが本当に好きで続けていきました。

ぼくのうちは商売をやっていたので、今兄が商売を継いでいるんですけれども、ぼくもサッカーじゃ飯が食えないと言われて、大学では商学部か経営で、経理の勉強をやれと親には言われていました。でも、インターハイで準優勝をしたことをきっかけに、松本育夫監督のときだったですけど、アジアユースでまた高いレベルでサッカーをすることができて、自分の中でもまだサッカーを続けたいという気持ちでいました。

ちょうど 1980 年に東京で行われるワールドユースに向けた準備期で、高校選手権に出て、また早稲田を受けて、現役時代は教育学部を落ちました。青木先生に相談したところ、お前は1年浪人してもう一回早稲田を狙えと言われ、ぼく自身はどこかに入ってサッカーを続けたいと思ったんですけど、毎日午前中に予備校に通って午後は高校に行ってサッカーを続けるという生活を1年続けました。

翌年、体重が5キロ増えていたんですけれども、早稲田の入学が決まって入りました。そのときに宮本征勝さんとの出会いがありました。そのとき早稲田のコーチとしていらっしゃいまして、監督は堀江先生だったんですけど、宮本征勝さんの指導の下でやっていきました。そのときは非常に厳しかったです。エイトマンと言われるくらい、まだ30代だったと思うのですけれども、プレーでは両足タックルが飛んでくるわ、練習も厳しいし、筋トレもやっていて…。

でも、宮本さんの情熱というのは、自分が代表として世界と戦ってきて、とにかくインターナショナルな選手をつくりたいんだ、ということで、我々は学生のスポーツだったんですけれども、とことんそういう意味で、4年次に本田技研に監督として移られたので、3年間徹底的に練習をしたなというふうに思っております。そういう意味では、サッカーを教えてもらったのは大学に入ってからだったというふうに思います。

そして、その甲斐あって、上田先生がユニバの監督のとき、学生選抜とかに選んでいただいたりと、本当にいろんな指導者の方との出会いがふくらんでいったといいますか、自分もその中で自分も大きくしてもらったなというふうに思っております。

ぼく自身も本田技研の方で、現役で社会人としてプレーし続けるという決断をしまして、7シーズンサッカーをしました。

そして、現役のときに腰のすべり症の手術を 27 歳のときにしています。3 ヶ月寝たきりで、リハビリに1年かかりました。でもそういうところを越えて、まだサッカーをやりたいと思って、あと3 シーズンやりました。そういう腰のこともあって、そしてサッカー界もアマチュアからプロのJ リーグができるという変革の時期にあり、あと1, 2年やっていればJまでできたと思うんですが、宮本さんが、お前はプレーヤーとしてはもう無理だから、指導者の方に入れということで、91年、92年と早稲田大学の監督を引き受けさせていただきました。

それは宮本さん自身が古河電工でやっていたシステム、派遣ということで本田技研にも働きかけて もらって、午前中仕事をしながら、午後はトレーニング、という生活を2年間させていただきました。

91 年に現役から指導者への道に入ったわけなんですけど、93 年から J リーグがスタートすると同時に、本田技研を裏切るような辞め方をしまして、鹿島アントラーズのサテライトの監督として行きました。

早稲田の方でも1年目にインカレでも優勝しまして、あのときは大倉がキャプテンで、その下に池田とか、2学年下には今年から川崎で監督を務める相馬や原田というメンバーがいたんですけど。決

勝は東海大で0-0でPKで勝ったんですけど、そうそうたるメンバーだったので、内容的には負けていたのですが、なんとか勝つことができました。

◆ 鹿島アントラーズサテライトの監督時代

そういう自分の経験の中から指導に入りまして、Jリーグができるともっと上のレベルでの指導を体験したいということで、本田技研の監督よりも、やはりJのサテライト、若手のところですね。その指導ということで、サテライトの監督として入りました。

93,94年Jリーグも始まり、そのころしっかりした一貫指導ということで、必ずサテライトを持てと。そして人数は集まっていなかったですけどトップチームにつながる若手を育てろと。高校を卒業した、あるいは大学時代くらいの18から21,22歳の年齢だったです。

このときトップとサテライトで35名くらいだったので、トップが20数名いると、こっちはワンポジション1人くらいで、10,11名くらいでトレーニングしろと。これだといつも少人数のところで、なおかつ上でけが人が出ると取っていかれて、そのときのトレーニングは非常に苦しい1年だったのを覚えています。

そのときのアントラーズの考え方というのは、トップとサテライトというのは時間もグラウンドも別にしろと。そのくらいハードルを高くして、プロというのは高いところだと。そこに自分でのし上がってこいということでした。ですので、ファーストステージにアントラーズが優勝したんですが、我々は別のチームが優勝したような印象を今でも持っています。

そういうところを2年やって、財政的にも、10名程度で別れてトレーニングをやっていても、そこから上がっていくことはあまりないと。そういう意味で、もっと人数を縮小して、トップとサテライトを一緒になってトレーニングをやっていくシステムに95,96年から変わっていったのを覚えています。

そうすることによって今度はレギュラーに、あのころは 94 年のワールドカップが終わって、ジョルジーニョやレオナルドなど、世界でプレーしていたプレーヤーと一緒にトレーニングができるようになります。この環境というのは、すごく大きかったと思います。プロに入ってくる選手というのは、一つ自分の持ち味というのを持っておりますし、ただ一つの持ち味を活かすのも周りのベースというところを上げなければならない。あるいは、18歳のところでプロになって、メディアから脚光を浴びて、そしてお金も自由になってくる。そうすると、しっかりとしたトレーニングと休養と栄養の3つのバランスをどういうふうに自分でとっていくか。ここをどうやって指導していくかというところで、やはり親元を離れて、お金も自由になり、そして誘いも多くなる中で、どうやって自分で自立してやっていけるのか、そして自分で考えてプレーをしていく。

こういうことが身についたプレーヤーが、レギュラーを張っていっていると思いますし、そういう環境というのはすごく大事ですし、我々指導者もしっかりとフォローしてあげなければならない年代だなと思っています。そういう中で、18歳から22歳という年代は、すごく難しい年代だというふうに感じました。

そこから J リーグも、日韓ワールドカップに向けて順調にいけたかと思います。経済的にもなんと か順調にきて、2002 年の次の目標をどのように定めるかということを、そこで 4 年毎のワールドカップもありますけど、上を目指してサッカーのレベルをいかに上げていくか、いかに日本のスタイルを つくっていくか。

そういう中で高校年代で、日本独特のシステムだと思うんですけど、高体連があり、大学サッカー、 そういうところの部分を含めて、大人のサッカーにつながっていく。これは海外にはあまりないこと だと思うので、そこを日本の形として、いかに創り上げるかが大事なポイントになってきているんじ ゃないかと思います。

◆ 川崎フロンターレ時代

ぼくは 2004 年から監督として、今度は川崎フロンターレの方にいきます。そのときはJ2の川崎フロンターレだったので、非常にトレーニングの方もスムーズにいきました。というのは、J2にはナビスコカップがないからです。また、J2はそのとき 44 試合だったんですけど、1週間のしっかりとしたトレーニング、それに週末の試合というサイクルをしっかりと取れた中で、指導ができました。ですから、J1で1,2年レギュラーでやれない選手は、J2に送って試合をさせた方がいいんじゃないかなというところを非常に考えました。2004 年に私が行って、若い選手たちもレベルは少し低いですけれども、そういうプレーヤーが実践することで、チームとしても個人的にも伸びてきたなと感じました。

そして、"いつゲームの中でどの技術を使うのか"。今度これが 18 歳から大人になっていくために 大事なポイントになってくるんじゃないのかなと。技術をどこでどう発揮するのかと。逆にそういう のを発揮しちゃいけないこともあるでしょうし、そういうところを判断としてやっていかなければな らないと。

それが勝負になったら命取りになってくる。こういうところをしっかりと的確に、指導者が指摘していくと。それが日頃のトレーニングであり、そうしたことが実戦の試合に活きてくる。そういうことを本当に思います。ただそれが一週間のスパンがあれば、たとえば最初のところで技術、そしてグループ戦術、戦術的なチーム作り、そして紅白戦など、うまくサイクルが回るんですよ。

J1に入って、今アジアチャンピオンズリーグに参加するようになりますと、土曜日に試合をして、次の日曜には飛んでいかなければならない。帰ってきて木曜日で、翌日準備をして、週末にはまた試合。

こういうサイクルになると、試合に出ている人と、出ていない人の差がどうしても出てきてしまう。 本当に伸ばしたい若い選手でも、一緒にいる時間が極端に減ってしまうんですよね。こうなってくる と、育成というものをどのように、チームとして、クラブとして考えていくか。特に上位になってく ると、そういうところにぶつかってきているんじゃないかなと、ぼくは現状として思います。

それだけに大学サッカーというものの価値が、日本での大学の比重というのが大きくなってきていると思いますし、またJのクラブでも即戦力として、年々大きな役割が増えてきているんじゃないかなと、ぼくは今までやってきて感じているところです。

◆ おわりに ~ロンドンオリンピックへの決意~

クラブで 93 年から昨年までやっていて、今回代表の仕事ということで、いろんなところを回って 逆に刺激を受けているといいますか、ある意味いろんな方々、指導者から意見も聞きますし、こうい う生い立ちでこういう選手が育ったのかという環境を、つくづく感じています。松田先生、黒田先生 に、ぼくもこれから先生方に追いつくように微力ながら仕事をしていきたいと思います。

当面はロンドンオリンピック、そこに出場してこの年代の選手たちがしっかりと世界と戦っていく。 その環境を勝ってつくっていかなければならないと、つくづく思っております。

そのためにも皆様のご協力をこれからもぜひいただきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。どうもありがとうございました。

ディスカッション②

コーディネーター 中塚義実

中塚

ありがとうございました。18 歳から22 歳の年代ということで、ちょうどここには大学の関係者も大勢おられます。それぞれの大学でのトレーニング環境であったり、あるいは学生の生活環境であったり、いろんなテーマが考えられると思います。

全体に振る前に、まず松田さん、黒田さんに、今の関塚さんの話をお聞きになって、また高校生を 指導されて、大学やJに送ってきた立場として、18歳から22歳の年代で、どういうプレーヤーが伸 びて、どういうところでつまずきがあるか、そういうあたりも踏まえていただきながら、その年代の 指導について考えておられることをお話いただければと思います。

松田

私は今大学8年目なんですけど、サッカーを通して学ぶ、スポーツを通して学ぶというのは、高校と同様大学でも非常に重要な教育だと考えています。もちろんJでもそういう教育をなされているとは思うんですけど、大学の強みというのは人間教育の部分で、もっと徹底していかなければならなりません。

そして、日本のスポーツ、サッカーを支えていくプレーヤー、人材を育てていかなければならない というふうに考えています。

田黒

Jにも東西南北といいますか、経済的な 面でも格差がありますし、考え方も様々な ものがありまして、もちろん降格すれすれ で育てる余裕もないところもあります。そ ういった意味での人間としての期待、人間 教育としての期待というのは、私は体験か ら大学の方が数倍大切、重要だと思ってお ります。



中塚

つまり、プレーヤーとしてだけでなく、 その年代は人間性をいかに高めていくかどうか、そういう観点で大学サッカーのメリットというのは かなりあるなということですね。

それでは、フロアの皆さんから U-18 から U-22 のところで、もしかするといろんな現場でいろんな 問題を抱えている方もいるかもしれません。 どんなことでも構いませんので、質問あるいはご意見、 ここからはフリーでディスカッションしていければなと思います。 延長戦の大学サッカーは何をすべきか、というところも含めて、議論できればと思います。

上田

申し上げたいことがたくさんあったんですけど、時間がありませんでした…。

◆ 大学サッカーについて

今大学サッカーの話が出てきましたが、私は代々の日本協会の会長に伝えてきたのですが、日本が世界のトップにあるもの、日本が世界に誇れるものは、"大学スポーツ"と "企業スポーツ"なんですよ。これは世界中どこの国も追いつけないです。たとえば他の国で、小学校、中学校、高等学校で体育実技が必須というところは少ないんです。でも日本では学校教育、学校体育の中で、サッカーをほとんどの人が体験しています。こんな国はないんです。

だから日本協会としても、学校体育の中にあるスポーツ、特にサッカーを大事にして下さい、中学 サッカー、高校サッカー、大学サッカーを大事にして下さいということを、長沼健さん、岡野俊一郎 さん、川淵三郎さんに話に行っています。

それくらい日本というのは、大学サッカーというのが特徴です。それと同時に企業。今プロスポーツができて、企業スポーツが低迷してきているんです。もちろん世の中の流れがあると思うんですけど。でも、日本は、高校サッカー、大学サッカーが世界のトップを行っていると思うんですよね。それを続けて行こうと思ったときに、大学でスポーツができて、企業に就職できる。その後企業でもスポーツができる。

そういう道を、協会あるいは国がどう考えていくか、私は長年 18 歳から 22 歳の年代の選手を持ってきて、考えていたんですね。

◆ 評価の仕方

もう一つ、さっきから気になったことがあります。それは、選手を伸ばすかどうか、チームを勝たせるかどうかに関して、非常に大事なことがあります。それは学校体育の中でもできることなんです。

それは「評価の仕方」です。たとえば、いいプレーをして褒める。まずいプレーをして叱る。ほとんどの世界で、褒めるか叱るかなんです。その中でも、私の体験からしたら、関塚くんもヨーロッパに一緒に行ったことがあるけど、私は5段階評価をつねに意識しながらやっています。後から振り返ってもよかったなと思っています。

たとえば、いいプレーが出ますね。でも、そのプレーをする実力が元々ある。それでいいプレーが出る。その場合は、私は褒めません。それは当然だからです。それを褒めると、その選手はそこで慢心してしまいます。それ以上頑張らなくなり、成長しなくなります。その実力通りのプレーができたときには、私は"認める"んです。選手はいいプレーをしたときには、必ずベンチを見るんです、練習でも試合でも。そのときには、褒めるんじゃなく、"認める"んです。

我々がもうちょっとできるんじゃないか、期待感を持っているときに、いいプレーが出る。これは 褒めてやるんです。「それだ!もう1回やってみろ!」。

さらに私ども指導者が予想もしないすごいプレーをすることがあるんですよね。これは褒めるだけ じゃ駄目なんですね。褒めてさらにプラスαが必要です。

できたときには、「3段階で評価」をする。私はこれが大事だと思います。

ミスが出るのは、力があるのに怠慢した、ボーッとしていた、あるいはいろいろ考えてうまくやろうとし過ぎたとか原因があると思います。これは絶対に見逃してはいけません。

そのミスの中にもとんでもないミスがあるんですよ。たとえば、私はピッチを3つに分けて考えるんです。ディフェンスゾーン、ミドルゾーン、アタックゾーン、とね。アタックゾーンでは、ミスをしてもどんどんチャレンジして欲しい。でも、ディフェンスゾーンでは、ミスが絶対に許されないんですよ。やはり、ゾーンによってのプレーの使い方、判断を間違って、そういうところからミスが起きてくる。これは絶対に許されないですね。

こういうのは、叱るだけじゃ駄目なんですよ。私は叱るプラスペナルティ。関塚くんもよく分かる と思うのですが、「半殺し」というやつです。その選手だけじゃないんです。周りにいる選手も、それ が伝わります。

つまり、選手の"認め方"、"評価の仕方"。これも5段階です。私は35,6歳のときに気付いたのですが、もっと早く気付きたかったと思っております。こういうのもお考えいただきたい。

中塚

ありがとうございます。生の言葉が出ましたけど、関塚さんもドキッとされたのではないでしょうか。

どうでしょうか、大学サッカーの今後も含めた話で。

松本光弘

先ほど黒田先生に名前を出していただきました、走らせっぱなしだった松本です。上田先生には大学に入ってすぐからお付き合いいただきました。今日みたいなアカデミックな話を先生から聞いたのは、ここ何十年かで初めて、感激したのと同時に、すごい人だったんだなと改めて思いました。

今いろいろと話を聞いておりまして、一つだけ私の感想を言わせてもらうと、大学サッカーの方にちょっと重みが、あるいは流れが傾きすぎているのではないかと思います。ここの雰囲気がですね。もっとJリーグの大切さ、あるいはJリーグのアドバンテージを素直に認めて、それで私たち大学関係者はその中で何をやるかっていうのが大事だと思います。私も筑波大学で永年皆さんと一緒にやってきて、今終わって考えますと、特に中田英寿とか小野伸二がJリーグの方に直接行って、大学の方はずいぶん寂しいころもあったのですが、そのころこれは当然だなと思いながらも、どうしても私たちがやらなければならないことを幾つか考えていたのです。

一つは、その人たちのレベルを大学のレベルに引き込むこと。いわゆる、今の素材を大学に入学させること。それからもう一つは入学して来た人たちを、的確に最高限度活かして・・。それはサッカーだけでなく、人間的にも社会的にも、あるいは審判の世界でも、コーチの世界でも、新聞社の世界でも、すべての世界に大学のサッカーを通じて送り出す人材を育成していかなければならない。

その当時、どうしてもJリーグにかなわなかったもの、それはイクイップメントやファシリティ、いわゆる芝生のピッチ。もともと私たち大学は芝生のピッチを持っていなかったのです。それから素晴らしい環境、いつでもトレーニングできる時間、そういうのは大学にはなかったです。それをどのような形で克服するかということで、グラウンド整備を必ずするとか、運良く部員はたくさんいましたのでできました。でも昼休みにどれだけ整備しても、やはり芝生には適わない。

しかしここにきて、非常に時代が変わったのは、天然芝ではないけれども、それに近い人工芝ができたということで、現在関東大学サッカーリーグの1部チームを見渡したら、人工芝のグラウンドを持ってないチームは一校もありません。全チームが最低人工芝のグラウンドを必ず持っているのです。そういう意味では、イレギュラーのしない、ワンタッチのプレーをしろ、またドリブルを確実にしろと言って、そこでミスったら「技術的要素です」、と言える状態にきているということです。そこで一

つの大きな要素、Jリーグに及ばなかった部分が、克服できつつあると現在は考えつつあります。

それは完全ではないけれども、そういうことも考えて、先ほど言った J リーグをもっと見直さなければならない、 J リーグに力をつけていただきたいとうのは、先ほどの鹿島アントラーズの話の中に出てきたジョルジーニョと一緒にプレーできるということ。そのように日常隣にいたら、それはもう全然違いますよね。だからそういう意味で、そういった環境を大学は持っていないけれども、なんとかデンソーカップとか、そういうものをつくり上げようとして、この大会を 25 回も続けて来たわけです。

その劣らない点を、なんとか補っていこうというのが大学。それは大いにやって欲しいと思います。 大学を離れた私のサッカー界への希望からすれば、Jリーグの育成がもっともっと高いレベルになって欲しいと思います。そういう意味では、大学に追い越されつつあるのかなとも感じられます。大学に追い越されてはならないというJリーグにもっと頑張ってもらいたい。このような構図が、今日の私のシンポジウムを聞きながら、なんか大学の方にもっともっと力が注ぎ込まれつつ、Jリーグの方を見ずして語られている今日のシンポジウムがちょっと気になったので発言いたしました。

ありがとうございました。

田中俊也

静岡から来た田中と申します。医者をやっています。大学サッカーとは、何の縁もゆかりもありません。松田先生と南アフリカでご一緒したり、私浜松の辺りで勤務していたので、おそらく関塚監督とは接点があるんじゃないかと思うんですけど。私は門外漢といえば門外漢なのですが、一つ言いたいことがあります。

大学サッカーに求めるというか、サッカー選手である前にみんなは大学生なので、まずは勉強をして欲しいんですね。広州のアジア大会に上石ドクターが帯同されましたが、彼は仲間なので先週たまたま報告を受けたんですけども、ドクターが困ったのは何かというと、大学生が自分の受けた予防接種が何か知らないんですね。 J リーグから来た選手はメディカルチェックのノートをちゃんと持っていますから、何の予防接種を受けたか知っているんですけど…半分「冗談じゃないの?」と言ったんですね。大学生だったらそのくらい知っているんじゃないと思ったんですけど、指導者に聞いてもなかなかないし、今のかかりつけ医になんとかたどり着いて予防接種を聞いたとか。



新型インフルエンザが流行ったとき、予防接種をしたかどうかの記憶もないというんですよ。それは非常に困ると思うので、まずは自分のことは自分でやっていただきたいと。勉強した上で、サッカーをやる。非常に有意義で、その上で代表に選ばれればいいんですけど、こんなぼくが苦言を呈すのもなんなんですけど、まずそういうことをやった上で、大学サッカーを今後も展していって、いずれJリーグと共存ということでいえば、静岡から来たぼくが言うのもなんなんですけど、医学部に通いながらJリーガーになるということが出てきて

もいいんじゃないかなと思うんですよね。でも、出てこないですよね。千葉大学に通いながら J リーガーをやっていた人がいましたけど、本来は大学は勉強するところですから、 J リーグをしながら勉強したいやつを受け入れるとことであって、彼が不幸にしてリタイアしたら、大学のリーグ戦に、という環境になって欲しい。たしかドイツのブンデスリーガが 2, 3 部にあると聞いたことがあるんですけど、そのような受け皿になって欲しいと。ただ、組織的にそれがすぐできるかは分からないので、

非常に勝手な印象なんですけど。

まず学生の皆さんは、まず勉強して下さい。後は予防接種。自分が受けたもの、代表に選ばれるか分かりません。選ばれたときにドクターを困らせないように、自分のことは自分で管理して下さい。よろしくお願いします。

川野眞治

私は60年代の初めの方で大学でサッカーをやっていました。今69歳で、もちろんシニアサッカーに興味があり、プレーもしています。上田先生が指導をはじめたときに私は学生でしたから、上田先生の指導するチームとも試合をしたこともありますし、いろんな話を聞いたことがあります。その当時と、大学サッカーは大きく変わってきたと思います。現在の大学サッカーはJリーグを目指しているように見えますが、なぜJリーグを目指すかということがどうしても納得いきません。先ほどの方が言われた通り、大学というとことは勉強をするとことだと思います。ですから、サッカーをしたから勉強できないというのはあり得ないと思います。また、Jリーグは大学サッカーに何を求めているかということです。そのへんがよく分からない。

大学サッカーのあり方について、私は国立大学出身なので、今のあり方はずいぶん私たちの時代と違うんじゃないかなと思っています。昔はシーズンというのが秋だけでしたから、秋に集中して年間計画を立てていました。今はのべつまくなしでやっていますよね。いつ勉強するんだろうな、と。私の感想はそんなところです。Jリーグが発足してビジネスとしてサッカーをやっていかなければならないわけですから、それはそれで結構だと思うし、大学がそれに引きずられるのも仕方ない面もありますが、大学が自らJリーグを目指すというのは少し違うんじゃないかなと思っています。先ほど上田先生もおっしゃっていましたが、社会の中で自分の居場所をみつけていかなければならないのですから。現状はそういう意味での教育というか、人間のあり方というか。大学サッカーのあり方が私たちの時代と少し違うように見えます。

もう一つ、先ほど黄金世代の話がたくさん出ていましたけど、黄金世代が出てきた社会的な環境、たとえばサッカーをやる環境、あるいは指導者の指導のあり方とか、ずいぶん当時とは違ってきたと思います。今はもっと情報もインターナショナル。いろんな形でいろんな情報が入ってくると思います。ある意味では、当時よりもサッカーをする環境ははるかに整っていると思われますね。でも、いつまでも黄金世代の話題が出てきます。黄金世代が出てきた条件を現在の指導者たちはどのように考えているのでしょうか。それが分からない。それが分かれば、今でもその条件を整えれば。私は指導者の個性というのが当時とずいぶんと違うんじゃないかなと思いますが、いかがでしょう。

松本光弘

今お二方からお話がありましたが、あえて私は、大学でサッカーを教えてきた、あるいは大学で学問と称されるものを扱ってきた人間として、その立場から言わせていただきます。

今言われた学問とは何かというところになってくると、今やっている大学のサッカーがおかしいん じゃないかと、言われているような感じがしないでもないのです。私が永年非常勤で行っている獨協 大学。ここの創始者の天野先生は、「大学は学問を通じての人間形成の場である」と言っています。今 もそれを刻んだ石碑で残っています。上田先生の話を聞かれて、たぶん思われたと思うのですが、よ しこれで明日から仕事頑張るぞ、と。私はそう感じました。それがある面では人間形成、ある面では 学問の非常に大きな力じゃないかなと。

何かを記憶したとか、少なくともサッカー選手はクリエイティブであれというのは、黒田先生が何もない新設の滝川第二高校に行って、なんで黒田先生が今のようなすばらしい成果を出す学校にできたかといったら、黒田先生は大学で培った幾つかのことを使って、白紙の用紙に、今のような滝川第

二高校をつくった。これはれっきとした学問の何かがあるからじゃないかと思います。たしかに、サッカーばかりをやっていたのでは駄目だというのはもちろんあります。その代わり、サッカーが学問に通じないということを言われると、ぼくはエッという感じがします。

たしかにある方面を注意しなさいよ、という警告だとは思いますが、今やっていることは駄目だ、ここでやっていることは駄目だと言われると、私はここにいる大学サッカー関係者の代表とまでは思いませんが、一員として言わせていただきました。

中塚

ありがとうございました。だいたいこういったシンポジウムは、面白くなってきたころに時間がき てしまします。

先ほどの質問といいますか、またここで黄金世代の話が出ましたけど、実はシンポジウムが始まる前の打ち合わせでもその話になりまして、黄金世代というのは彼らだけ突出した素材を持っていたのだろうか。そうなのかもしれません。けど、あの年代は、当時の社会的な環境の中で、中学2,3年のときに海外を経験している。それも「君たちは注目されているんだよ」、という形でいろんな経験を積んでいます。日本協会も資金が潤沢だったということもあって、強化費もかなり出たし、ワールドカップの招致活動の一環というのもありました。あの世代の素材が突出していたかどうかは分からないけども、トレーニング環境としては突出していたのではないかといえると思います。それから関塚さんご自身、私もほぼ同世代なんですけど、79年のワールドユースに向けて、かなり突出した強化をやっています。つまり、そうやって手をかけることによって、プレーヤーが他では得られない経験をすることによって伸びていく。そういう意味では、そういうアプローチを、育成年代、U-22も含めてなんですけど、しっかりと手厚くしてあげれば、全国各地に伸びる素材はいくらでもいるんじゃないかなという気がしております。

最後にお三方から、シンポジウム全体を通して、感じられたこと、あるいは大学サッカーへの提言 を含めてコメントいただければと思います。

松田

自分が大学に行かせていただい たのは、上田先生のような指導者 になり、いい人材をつくってサッ カー界に少しでも貢献したい。そ れを上田先生のお話を聞きながら、 今日改めて思いました。

ありがとうございました。

黒田

先ほど松本先生に言われましたが、大学で得たものは大変大きい。 そのことを次の世代に伝えていき たいという想いでやってきました。一部お話がありましたように、大学生は昔エリートの中にいたと思います。ピッチの上でもエリートの意識を持って欲しいし、ピッチを離れても自分たちはエリートとして日本のサッカーを引っ張る、あるいは貢献する。そういう仲間であって欲しいなと思っており

ます。

ありがとうございました。

関塚

本当にこういう機会でいろんな方々、指導者の方々の意見を聞かせていただくのは貴重だなと、ぼく自身は思っております。どうしてもクラブにいますと、そこで勝った負けた、あるいはそこにいる選手を育てるということだけになってしまいますが、もっと広い意味でのシステムを含めてしっかりとしたものをつくっていくというのが非常に大事だなと。そしてまたそういう考えを指導者の皆さんで共有していくということが非常に大事だなと、つくづく感じております。

これからやはり日本のサッカー界が世界トップ 10 という目標に向かっていくためにも、そこを皆さんで作り上げていくということが、大事だなと。これは他人任せではなく、一人ひとり立場で、どういうことが考えられるかを、こういう席で議論しながら、作り上げていくということが、大事だなということをつくづく感じました。

今日は本当にありがとうございました。

中塚

最後に上田先生、お願いいたします。

上田

だいたい2時間くらいしゃべらないと気がおさまらないのですが…。

資料の中にこの表(参照:本報告書P. 53)を入れさせていただきました。これは大学サッカーの指導者になりまして20数年経って、「スポーツマンとは何なんだろう?」というのを考えたものです。そのきっかけは、岡野さんといろんな話し合いをしていて、岡野さんに「スポーツマンシップって何なんだろう?」ということを考えさせられたからです。

ちょうどそのころに、藤島部屋の二子山親方が私どもの大学で2ヶ月間くらい合宿をしたことがありました。そのとき二子山親方は人気があって、色紙をたくさん頼まれるんですね。でも、彼は色紙には全部一緒で、「心・技・体」しか書かないです。私は毎年親方のところで飲む機会があって、そこで、「親方に相撲は心技体だけなの?私は違うと思うよ」と、親方といろいろと話すわけです。

親方との話、そして岡野さんとも、「スポーツマンって何なの?」「社会人って何なの?」と考えてきて、集大成がこれなんです。

「技術」を支えているのは、やはり「体力」がなかったら支えられません。それに「感性」がなかったらおかしくなるんです。それから「メンタル」の面がなければ支えられません。

クラマーさんが、よく教えてくれたんですよ。ヨーロッパよりも南米よりも、日本には技術の高い選手がいっぱいいると。でも、「なぜ勝てないの?」と投げかけられたことがある。クラマーさんの言葉をもとに作ったんですが、「感性」、「体力」、「精神力」ですが、その三角形を支えるのが、「技術」と「戦術」だと思っているんですよね。「戦術」とはすごく難しいですが、私は"判断"、"考え方"、"取組み方"が「戦術」だと考えています。

それで、サッカー選手としていけるのかといえば、いけないですよ。私はいつも企業の経営者にもこの話をしているんです。やはり企業は人間をつくらなければならない。なぜスポーツマンが社会に出て仕事ができるのか。できる人もできない人もいますが、そのスポーツマン、スポーツマンシップというのはこの「戦術」。すべてを支えるのは「人間性」だと思います。「人間性」とは、"気がつく人"、

"労をいとわない人"、"勇気のある人"で、スポーツをやりながら、教育を受けながら身につける。 また"思いやり"、"協調性"、"責任感"、こういった要因があります。

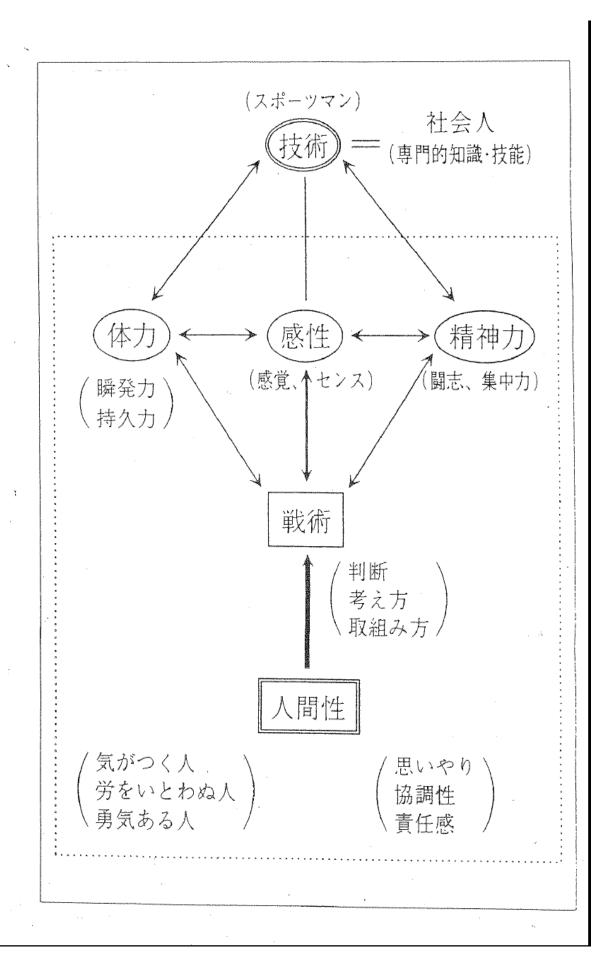
スポーツをしなくなっても社会に出ても、「技術」が「専門的知識や技能」に変わるだけなんです。 社会人の「専門的知識や技能」を活かすのも、全部この枠の中にあるんです。今からの学校体育、高 校サッカーや大学サッカーの中で、サッカーに限りませんけども、人間創造というものを描きながら、 スポーツを指導していただきたいなと思っております。

クラマーさんも言っていましたが、日本にはサッカーのスタイルがない。プロができてよくなった けど、スタイルがない。スタイルとは連続性です。特徴が活きてくるのがスタイルです。それを活か すのはこれじゃないかなということで作り上げました。これをさらに皆さんのお力で前に進めて、修 正していただければと思っております。よろしくお願いします。

中塚

ありがとうございました。ここにいる皆さん、もちろん私もそうなんですが、指導者の端くれとして今日得たものを明日からの現場に活かしていきたいなと思います。

松田さん、黒田さん、関塚さん、そして上田先生ありがとうございました。



参加者の感想(アンケートから)

- ◆ 上田先生の話の哲学を聞けたことは非常に勉強になった。ただ、テーマに対して、期待していた 内容と少し異なっていた。特に副題に対して、各パネリストの哲学、構想といったことを中心に、 具体的な取り組みや方法を聞けるとよりディスカッションしやすい環境になったのではないか と感じた。(青葉幸洋)
- ◆ 様々な立場の方が一同に一つのテーマに対し、ディスカッションするこのような場はとても有意 義でした。中塚さんが最後におっしゃいましたが、「面白くなってきた時に時間が来る」と、本 当にそう感じました。また別の機会で是非参加してみたいなと思います。(朝倉吉彦)
- ◆ 普通聞くことのできない色々な話をきけて、貴重な機会でした。特に上田先生の具体例をまじえ た話はおもしろく、かつ自分の中へ入ってきました。またの機会があれば参加させて下さい。 (雨堤俊祐)
- ◆ これから育成年代の指導に関わっていく中で貴重な話を聞かせて頂きました。上田先生が話され た指導者の心得や鉄則などを考えながら、自分の経験を活かしつつ、これからの指導に励もうと 思いました。(井田征次郎)
- ◆ ①たいへん興味深く有意義だった。②上田さんの話は、自分のサッカー指導の総まとめのようだった。有益だった。③大学サッカーの利点と欠点をもう少し突っ込んで論じたかった。 大学の指導者を対象としたシンポジウムとして、非常によかった。(牛木素吉郎)
- ◆ 上田先生のお話が大変参考になりました。(内田正樹)
- ◆ サッカーを通じて、多くの方々の意見を聞くことができ、また共有できたことを嬉しく思います。 (岡本真)
- ◆ 関西ではこういう研修が少ない。月に一度くらいいろいろな組織で研修をやってほしいものである。(尾崎正章)
- ◆ ①黄金世代の話がありましたが、黄金世代が出た環境と現在の環境は随分異なると思いますが、なぜ、当時黄金世代が出てきたのでしょうか。現在の方が環境も、情報も、コーチのあり様もよくなってきていると思うのですが?②上田先生の話を、満足できるコーチ、指導者は、実際上、難しいと思います。だとすれば、何にプライオリティを置くべきなのでしょうか。ケースバイケース?③大学サッカーのあり方は、Jを目指すだけではないと思います。④大学サッカーに何を求めているのか、求められているのか?(川野眞治)

- ◆ 上田先生の貴重な話が聞けて面白かった。特に、自己評価と他者評価。育成後の選手としての方向性はよくわかったが、成功の裏側で選手から裏方へ転身してくる層にスポットをあてての議論も今後あってもよいと思った。18~22歳で目標設定をつくらせることが容易ではないことがよくわかった。小さい頃から目標をつくる環境を整えないと、「今どきの選手はハングリーさがない」という言葉ですましてしまうことが続くように思われた。(河村和徳)
- ◆ 日本の育成哲学のブレというのは、一ファンとしてよく感じます。少し前まで中盤でスルーパスが得意な選手が育っていましたが、JFAが「仕掛ける」ことを重視したとたん、「プラチナ世代」にドリブラーが揃う一方、パサーが急速に減ったと思います。現 U-17 世代なら野洲の望月君くらいしか思い当たりません。一昨年 U-17 も柴崎君ぐらいでしたね。JFAが意志決定をするのは大切ですが、草の根レベルの指導者の発想を活かすシステムが必要だと思います。(北原徹)
- ◆ デンソーカップと合わせて、このような大きなイベントがあり、大変嬉しく思います。ありがと うございました。また是非このような機会があれば参加させて頂きたく思います。(久住真穂)
- ◆ 様々な経験を伝えるという場はとても重要だと思います。こういった言葉をもっともっと理解し、 欧州や南米だけでない日本発のものを考えることも必要なのではないかと思います。(古賀初)
- ◆ 黒田さんの懐の深さを感じました。帰ってがんばろうと思いました。(權藤誠)
- ◆ ディスカッションが盛り上がってきたところで時間がきてしまったのが残念でありましたが、全体として有意義な時間でした。演者の皆さんありがとうございました。 個別のトピック(指導者・システム・環境・Jと大学)をより深く話をしてもらいたかったが、育成期のサッカー全体の様々な話を聞くことができ興味深かった。(塩沢拓也)
- ◆ なかなかお目にかかれない方々から貴重なお話しがたくさんたくさん聞けました。さすがサロンです。ものすごい刺激です!! (関谷綾子)
- ◆ 先輩指導者の話をたくさん聞けたことは大変よく、今後の自分に活かせる話がたくさんあった。 現在の問題点の解決策が見付けられそうだった。数多く今回のようなシンポジウムを増やしてほ しい。(武本勝弘)
- ◆ 日本サッカーの創生期にご活躍された方、今現在日本サッカーを支えておられる方から直接生の言葉を聞き、とてもよい勉強になりました。先生方の言葉の意味を心に刻み、これからの活動に活かしていこうと思います。とても素晴らしい時間をいただきありがとうございました。指導者のあり方、責任の重さを痛感いたしました。自分にその資質があるか、もう一度見つめ直すよい機会となりました。(玉井茂)

- ◆ テーマが、「大学サッカーを語ろう!」でよかったと思いました。特に日本のスポーツの中で、 サッカーというスポーツが近代的、合理的スポーツであり、組織で足りえたのは、大学サッカー があったからこそだということをクローズアップしてよかったなあと感じました。(茅野英一)
- ◆ 上田先生の話を聴き、あらためて指導というものを考えて行わなければならないと再認識させられた。松田さん、黒田さん、関塚さんの貴重な話も今後の指導の参考にしたい。ディスカッションも盛り上がって、色々な意見が聞けて有意義であった。(西田裕之)
- ◆ 「キッズ~U-22 までの指導」については十分議論できていなかったのが残念でした。(橋詰)
- ◆ 最後にもっとシンポジスト3人のディスカッションを見たかった。(長谷川健司)
- ◆ 指導者としての考え方、あり方を深く考えられ、今までの自分自身の指導を見つめ直すとてもよい機会になりました。上田先生のお言葉、1つ1つ深く感動いたしました。シンポジウム中から、明日からの仕事に対するモチベーションがどんどん高まってまいりました。また、第2部の話を通じて、育成年代の選手たちに指導することの責任を感じました。このシンポジウムで感じたことを活かしていけるように、日々がんばっていきたいと思います。(畑山尚毅)
- ◆ 長年指導のトップでご活躍されている方々のとても貴重で素晴らしい話を聞くことができ、非常にありがたく思います。学びあるシンポジウムに参加することができ、今日の経験を活かして、今後の指導人生、生活にはげんでいきたいです。(原口淳次)
- ◆ あらためてサッカーの素晴らしさ、指導の重要性を認識できました。ぜひ全国の地方に活動を広げていただきたいです。(吉田卓史)

(掲載許可を頂いた方のみ)